

大阪市平野区

喜連東遺跡発掘調査報告

I

大阪市健康福祉局による建設工事

に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

喜連東遺跡発掘調査報告

I

大阪市健康福祉局による建設工事

に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

『喜連東遺跡発掘調査報告』I 正誤表

頁	行など	誤	正
28	図37キャプション	…、SD502 <u>(29・34・36)</u>	…、SD502 <u>(29・34)</u> 、SD504(36)
36	6行目	…・焼締陶器のほか…	…・焼締陶器のほか…
図版11	キャプション	…、 <u>SE304</u> (84)	…、 <u>SE303</u> (84)
英文目次 i	30行目	1) <u>Palalitic</u> Period…	1) <u>Palaeolitic</u> Period…



古墳～鎌倉時代の遺構(北から)

大阪市平野区

喜連東遺跡発掘調査報告

I

大阪市健康福祉局による建設工事

に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

現在の平野区喜連東は高層住宅が建ち並び、多くの人々の生活の場となっている。この地に対する人々の働きかけは太古に遡る。

本書に収録した内容は、時代では旧石器時代から江戸時代、種類では古墳・建物・耕作地などと多岐にわたる。これは、古来より人々が喜連東の地に連綿と係わってきたことを如実に物語る資料である。そこには各時代の目的にあわせて土地を利用した先人の知恵と工夫がうかがえる。

こうした過去の遺産は現代に生きる我々の目的のため、時には完全に消し去られる運命にある。しかし、現在の姿も長い歴史から見れば、ほんの一瞬にすぎないことを忘れてはなるまい。現在の姿はもとより、過去の遺産を正しく記録し、後世へと伝えていくことが我々の責務といえよう。

発掘調査もその方法のひとつであり、記録に残らなかった歴史、当時の生の資料を扱えるという利点をもつ。ただし、一度だけの調査ですべてがわかるものではなく、幾度もの調査の積み重ねが必要である。

最後ではあるが、発掘調査の実施と報告書作成に種々の御協力を頂いた大阪市健康福祉局をはじめとする関係各位に対し、心からお礼申し上げる次第である。

2003年3月

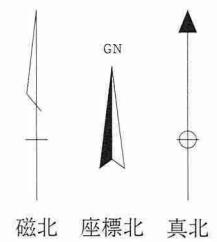
財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇田 修

例　　言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が大阪市民生局(現健康福祉局)の委託を受け、2000年2月から同年7月に実施した平野区喜連東5丁目における建設工事に伴う発掘調査(KR99-1・00-1次)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市健康福祉局が負担した。
- 一、現場作業は調査部調査課長京嶋覚(現調査研究部調査課長)の指揮のもとKR99-1次調査を同課主任高橋工(現同課調査第2係長)、同課調査員平田洋司(現研究資料課報告書作成係学芸員)、松本百合子(現学芸部企画広報課企画広報係学芸員)、KR00-1次調査を平田・松本が行った。
- 一、報告書の編集および執筆は、調査研究部研究資料課報告書作成係長松尾信裕の指揮のもと平田が行った。
- 一、遺構写真の撮影は平田が行い、遺物写真の撮影は西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。
- 一、基準点測量・空中写真測量はアジア航測株式会社に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。
- 一、本報告書で引用した当協会略報(文献名の末尾に「略報」とあるもの)に係わる内容は、将来、これらが刊行された時点での記述に従うものとする。
- 一、発掘調査から資料の整理、本書の作成に係わる作業には多くの補助員諸氏の協力を得た。深謝の意を表したい。

凡　　例

1. 遺構名の表記は、建物(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壙(SK)、そのほかの遺構(SX)の分類記号の後に、調査地の層序に対応させた層序番号を付し、さらに遺構の分類別に1からの通し番号を付した。
2. 遺物番号は1からの通し番号を付している。
3. 基準点は日本測地系による国土平面直角座標値(第VI系)を用いている。挿図中の方位は座標北・真北・磁北を下図のように区別して用いた。
4. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTPと略称した。
5. 本書で用いた土器編年や器種分類は次の文献によっている。古墳時代・飛鳥時代初頭の須恵器：「田辺昭三1981」、飛鳥・奈良時代の土器：「古代の土器研究会1992」、平安時代の土器：「佐藤隆1992」、鎌倉・室町時代の土器：「鈴木秀典1982」。本文中では煩雑を避けるため、これらの文献をその都度提示していない。



本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査の経緯と経過	1
第Ⅱ章 喜連東遺跡の立地と既往の調査	3
第1節 喜連東の立地と歴史	3
第2節 既往の調査	5
第Ⅲ章 調査の結果	13
第1節 調査の概要	13
第2節 層序	15
第3節 鎌倉時代以前の遺構と遺物	17
1) 遺構と遺物	17
i) 古墳	ii) 溝群
iii) 掘立柱建物	iv) 土壙
2) その他の遺物	27
i) 石器遺物	ii) 増輪
iii) 第5層出土遺物	
3) 小結	30
第4節 室町時代の遺構と遺物	31
1) 遺構	31
2) 遺物	31
3) 小結	32
第5節 江戸時代以降の遺構と遺物	33
1) 遺構と遺物	33
i) 段	ii) 井戸
iii) 溝	
2) その他の遺物	40
3) 小結	40

第Ⅳ章 調査成果のまとめ	41
1) 旧石器～縄文時代	41
2) 弥生時代	41
3) 古墳時代	42
4) 飛鳥～奈良時代	43
5) 平安～鎌倉時代	43
6) 室町時代	43
7) 江戸時代	44
8) まとめ	44
引用・参考文献	45
あとがき・索引	

英文目次

報告書抄録

原色図版目次

古墳

- 上：SX501・502検出状況(東から)
下：SX501全景(北から)

図版目次

- 1 調査地とその周辺
上：調査地の位置
下：調査地全景(北西から)
- 2 鎌倉時代以前の遺構(一)
上：北区遺構検出状況(北から)
中：北区遺構検出状況(南から)
下：南区遺構検出状況(北から)
- 3 鎌倉時代以前の遺構(二)
上：北区全景(南から)
中：北区全景(北から)
下：南区全景(北から)
- 4 鎌倉時代以前の遺構(三)
上：SX501・502検出状況(東から)
中：SX501全景(北から)
下：SX502検出状況(北から)
- 5 鎌倉時代以前の遺構(四)
上：SX501周溝内遺物出土状況(南から)
中：SD506検出状況(北から)
下：SD512断面(南西から)
- 6 鎌倉時代以前の遺構(五)
上：SK505遺物出土状況(北から)
中：SK507検出状況(南から)
下：SK507断面(南から)
- 7 室町時代の遺構・江戸時代以降の遺構(一)
上：北区全景[室町時代](北から)
中：北区全景[江戸時代以降](南から)
下：南区全景[江戸時代以降](北から)
- 8 江戸時代以降の遺構(二)
上：SD301・302(西から)
中：SE301(西から)
上：SE303(北から)
- 9 江戸時代以降の遺構(三)
上：SE304(北から)
中：SE307(西から)
下：SE311(西から)
- 10 出土遺物(一)
- 11 出土遺物(二)

挿 図 目 次

図1	喜連東遺跡の位置	1	図27	SD511・512断面図	24
図2	調査地位置図	1	図28	SB501平・断面図	24
図3	調査区配置図	2	図29	SK503平・断面図	25
図4	喜連東遺跡の立地	3	図30	SK504平・断面図	26
図5	喜連東遺跡の既往の調査地	5	図31	SK505平・断面図	26
図6	KR86-4次調査検出の方墳・方形周溝墓など	6	図32	SK506平・断面図	26
図7	KR86-3次調査検出の墳墓堂など	7	図33	SK507平・断面図	26
図8	KR86-6次調査検出「馬池谷」肩部	7	図34	SK510平・断面図	27
図9	KR87-2次調査検出の方墳	8	図35	SK505・507・509出土遺物	27
図10	KR89-2次調査検出遺構	8	図36	SK510出土遺物	27
図11	KR91-3・92-3次調査検出遺構	9	図37	石器遺物	28
図12	KR92-7次調査検出遺構	9	図38	各層出土遺物(埴輪)	29
図13	KR92-5次調査検出方墳および壺形埴輪	10	図39	第5層出土遺物	29
図14	KR99-2・00-2次調査検出方形周溝墓 および出土土器	11	図40	第4層出土遺物	31
図15	遺構変遷図	13	図41	江戸時代の遺構	33
図16	層序概念図	15	図42	北区江戸時代の遺構	34
図17	地層断面模式図	16	図43	SX301出土遺物	35
図18	鎌倉時代以前の遺構	17	図44	南区江戸時代の遺構	35
図19	北区鎌倉時代以前の遺構	18	図45	SE301平・断面図	36
図20	SX501平・断面図	19	図46	SE303平・断面図	36
図21	SX501出土遺物	20	図47	SE302平・断面図	36
図22	SX502平・断面図	21	図48	SE304平・断面図	37
図23	SD501断面図	22	図49	SE307平・断面図	37
図24	SD501出土遺物	22	図50	SE311平・断面図	37
図25	溝群断面図	23	図51	井戸出土遺物	38
図26	南区鎌倉時代以前の遺構	23	図52	SD303・小溝群出土遺物	38
			図53	第3層出土遺物	40

表 目 次

表1	喜連東遺跡調査地一覧	6
----	------------	---

写 真 目 次

写真1	KR94-7次調査出土錫装刀子	10
-----	-----------------	----

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

調査地の位置する大阪市平野区喜連東は市営東喜連住宅など多数の公営住宅が建ち並び、多くの人々が居住する地域である。木造住宅も多く、年月の経過による老朽化が進み、随時、鉄筋高層住宅への建替えが行われつつある。喜連東遺跡ではこうした建替えに伴う調査を主体として1980年より発掘調査が実施してきた。

喜連東遺跡の南東部にあたる当該地においても、当初、市営喜連東住宅の建替えが計画されていた。そのため1995年7月11日に敷地全域にて3箇所の試掘調査を行った。この結果、古代以前とみられる遺構のほか、古代から近世の地層が遺存していることが判明した。また、西で行われたKR91-3・92-3次調査において平安時代後期から室町時代にかけての多くの建物群や敷地を区画する堀など重要な遺構・遺物が密集して検出されていたことからも、工事が実施されるに先立って発掘調査が必要と判断された。しかしながら、この時点では建設計画の変更などもあり、実際に工事が行われることはなかった。その後、同地に大阪市民生局(現健康福祉局)により老人福祉施設が建設されることが計画され、大阪市教育委員会文化財保護課より調査協力を求められた大阪市民生局と財団法人大阪市文化財協会にて調査の実施方法などを協議した。

協議の結果、現地における調査は1999年2月より開始することとなった。期間が複数年度に渡ることから1999年度中の調査をKR99-1次調査、2000年度中の調査をKR00-1次調査とした。また、資料搬入・搬出の通路を確保するため調査区は南北に2分した。本報告書では北区、南区と呼称する

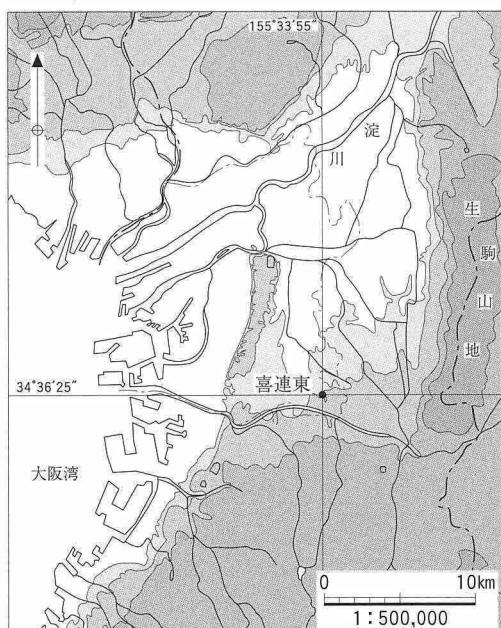


図1 喜連東遺跡の位置

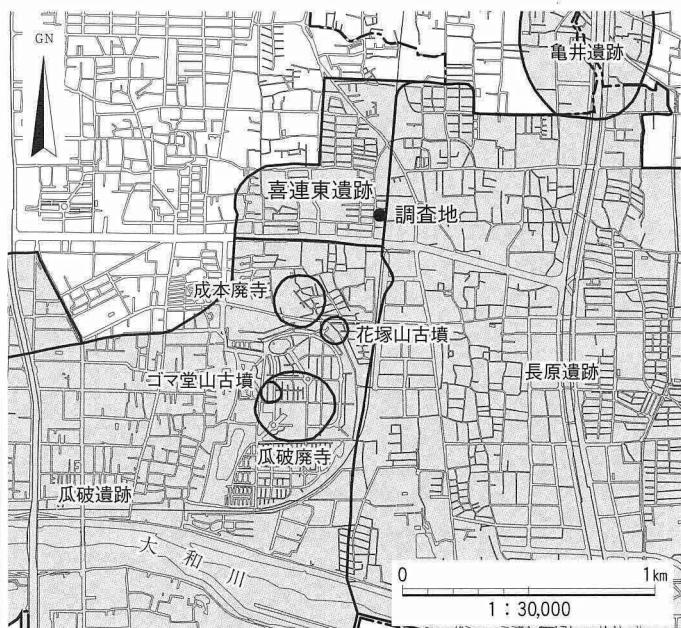


図2 調査地位置図

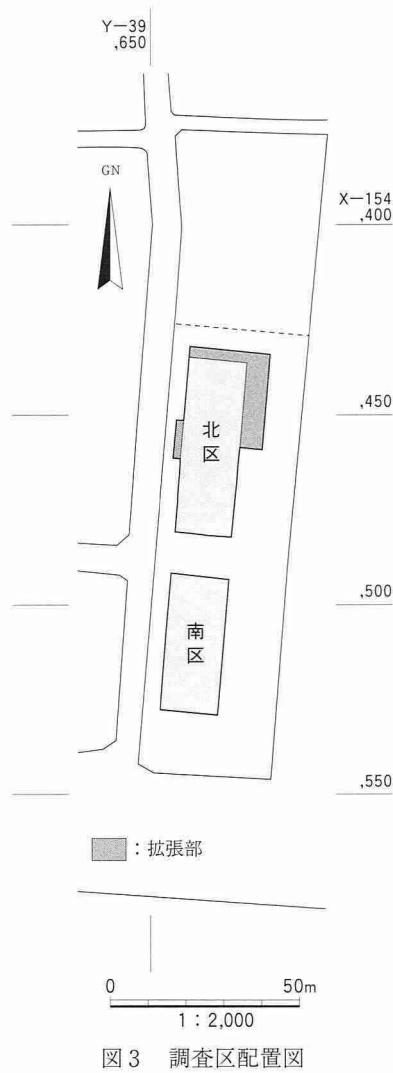


図3 調査区配置図

こととする。面積はそれぞれ690m²、510m²の計1,200m²である。報告書作成については調査結果を判断したうえで別途協議することとなった。

2月14日より調査地外周の整備、資材の搬入などを行ない、同月16日より重機による掘削を開始した。重機による掘削は現代作土である後述の第2層までとし、以下は人力による掘削で進めた。また、掘削で生じた堆土はすべて場内に仮置きした。

重機による掘削を始めたところ、南区では機械による攪乱が随所に見られるなど地層の遺存状況が悪かったが、北区では比較的良好であることがわかった。以下は人力による掘削を行い、適宜、遺構掘削、図面作成、写真撮影を行ないながら調査を進めた。

調査が進むにつれて、予想された平安～室町時代の建物群は調査地まで広がらないことがわかつた。一方、方墳2基・溝群を始めとする古代以前の遺構が北区を中心として検出されはじめた。そこでこれらの遺構については2個所において計250m²の拡張を行ない、遺構の広がりおよび全容の把握につとめた。古代以前の遺構については空中写真測量も行った。

調査の終盤には後期旧石器時代にあたる長原13層が北区北半を中心には遺存していたことから、この部分については旧石器遺物を対象とした調査も行った。また、人力による掘削で底が検出できなかった江戸時代の井戸については2基を対象に重機による深掘

りも試みた。

調査は7月4日に終了し、7月5日より埋戻し作業を開始した。7月28日には調査区周辺の整備を含め現地におけるすべての作業を完了した。

報告書作成については調査結果をもとにして協議を行い、2002年度に実施することとなった。

第Ⅱ章 喜連東遺跡の立地と既往の調査

第1節 喜連東の立地と歴史

喜連東遺跡は大阪市の南東部、平野区喜連東3・5丁目一帯に所在する。周知の遺跡の範囲としては東西約600m、南北650m(註1)である。従来、喜連東遺跡の立地する台地は瓜破台地とされていたが、周辺の調査の結果から瓜破台地とは谷で隔てられた別の台地であることが提示され、「長吉台地」と呼称されている[趙哲済2001]。これによれば喜連東遺跡は長吉台地の最先端に立地している(図4)。遺跡の現地表はTP+7.0~9.0mにあり、遺跡南東部がもっとも高い。発掘調査の結果からは、高所においては後世の削平が著しく、表土直下で洪積層が検出される地点がある一方、開析谷が検出される地点もあり、本来の高低差はさらにあったといえる。長吉台地と瓜破台地を区切る開析谷は「馬池谷」と呼称されるもの[京嶋覚1992]で、長原遺跡と瓜破遺跡の境付近を南南東から北北西へと延び、喜連東遺跡の南西部をかすめている。また、遺跡北部でも地形が落込み、北東には緩やかに下がっている。これらのことから喜連東遺跡は南を除く三方に開けた立地であったといえよう。周知の遺跡としては南に接して瓜破遺跡、東に接して長原遺跡があるが、本来、一連の遺跡として理解するべきものであろう。

喜連は古代行政区分では摂津国に属しているが、河内国と摂津国との境界にあたっている。「喜連」の由来は『万葉集』卷20に見られる「河内国伎人郷」、すなわち呉人の地とされている[井上正雄1992]。また、『日本書紀』雄略天皇14年正月条に「呉の客の道を為りて、磯齒津路に通す、呉坂と名く」とある「磯齒津路」は遺跡南側を東西に延びる長居公園通の前進とされている。『古事記伝』によれば「呉坂」は住吉から喜連にいたる途中の坂といわれている。しかしながら「馬池谷」は長居公園通を分断しており、古代においても埋没せず窪地であったことが発掘調査の成果から明らかになっており、この通りが古墳時代までさかのぼるという確証は得られていない。

また、地籍図や昭和30年代の土地区画整理施行図によれば「山王塚」・「伝忍坂大

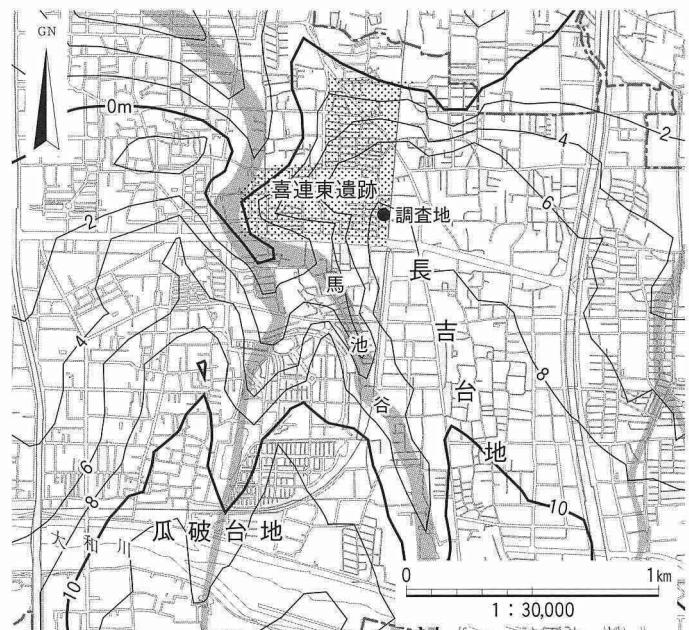


図4 喜連東遺跡の立地([趙哲済2001]より改変)

中姫御陵」・「伝息長田中姫塚」・「善法寺廃寺」など古墳や寺院の存在を推定させる地名が残されている。名称・位置の当否はともかくとして、発掘調査では古墳のほか寺院を推定させる遺構・遺物を検出している。

中世、天文～永禄期には高屋城の属城として喜連城がおかれ、細川氏綱や三好長慶らの陣所となつた。鎌倉～室町時代の遺構としては建物・井戸のほか堀状の施設を確認している。中国製磁器も多く出土しており、一般の集落とは違った様相を呈している。

近世、文禄～慶長期には摂津国欠郡もしくは住吉郡に属する。慶長10(1605)年の『摂津国絵図』には、住吉郡中に「東喜連村・中喜連村・西喜連村」とある。三村ともに寛永元(1624)年までは北政所領であった。その後、東喜連は幕府領を経て正徳3(1713)年から幕末まで下総古河藩領となる。江戸時代の遺構としては耕作に係わる小溝群・井戸を検出している。おもに生産域として利用されていたと考えられる。

近代以降は、明治22年の町村制施行により住吉郡、翌年には東成郡に属する。大正14年の住吉区成立により同区に、昭和18年の分区により東住吉区に、昭和49年のさらなる分区により平野区に属することとなった。

註)

(1) [大阪市文化財協会1999]では東西600m、南北300mの範囲としている。これは1999年当時の範囲であり、その後の調査成果から2001年より遺跡範囲は北東部に広がっている[大阪市文化財協会2001]。

第2節 既往の調査

喜連東遺跡ではこれまで小規模な立会調査を除いて約20件の調査を実施している(図5・表1)。調査原因の多くは市営・府営の公営住宅の建替えに伴い、市内の他遺跡に比較すれば大規模な調査が遺跡南部を中心に行われてきた。また、現地表から浅く遺構面が検出される地点が多く、各時期の遺構が同一面で確認されることから、時期決定が困難な遺構も少なくない。こうした状況のもと調査を重ねるに連れて次第に遺跡の様相が明らかになりつつある。本節では喜連東遺跡で行ったこれまでの調査を振返ることとする。

喜連東遺跡において最初の考古学的な調査を行ったのは1980年のKR80-1次調査である。市営住宅下水道敷設工事の際、平安時代の土器・瓦が出土したことに端を発して実施した調査で、遺跡南東部に当たる。道路内での幅の狭いトレンチ調査であったものの、古墳時代の埴輪片のほか平安～室町時代の柱穴群・土壙墓をはじめとする遺構、土器・瓦類の遺物などを検出した。このことから喜連東遺跡には古墳群および平安～室町時代の寺院・墓地・集落が広がっているとの想定を得た[大阪市文化財協会1980]。その後、当調査地を範囲に含む調査も実施しており、当時の想定が正しいことを裏付けた。

1982年度には遺跡南西部で府営住宅建替えに伴いKR82-2次調査を行った。初めての大規模な調査である。調査深度は深くまでおよび、のちに「馬池谷」の内部にあたっていることがわかった。7世紀初頭の遺構群のほか、弥生時代中期中葉の土器・サヌカイト、古式土師器を確認し[大阪市文化財協会1983]、喜連東遺跡の時代の広がりおよび重要性を深めるものとなった。

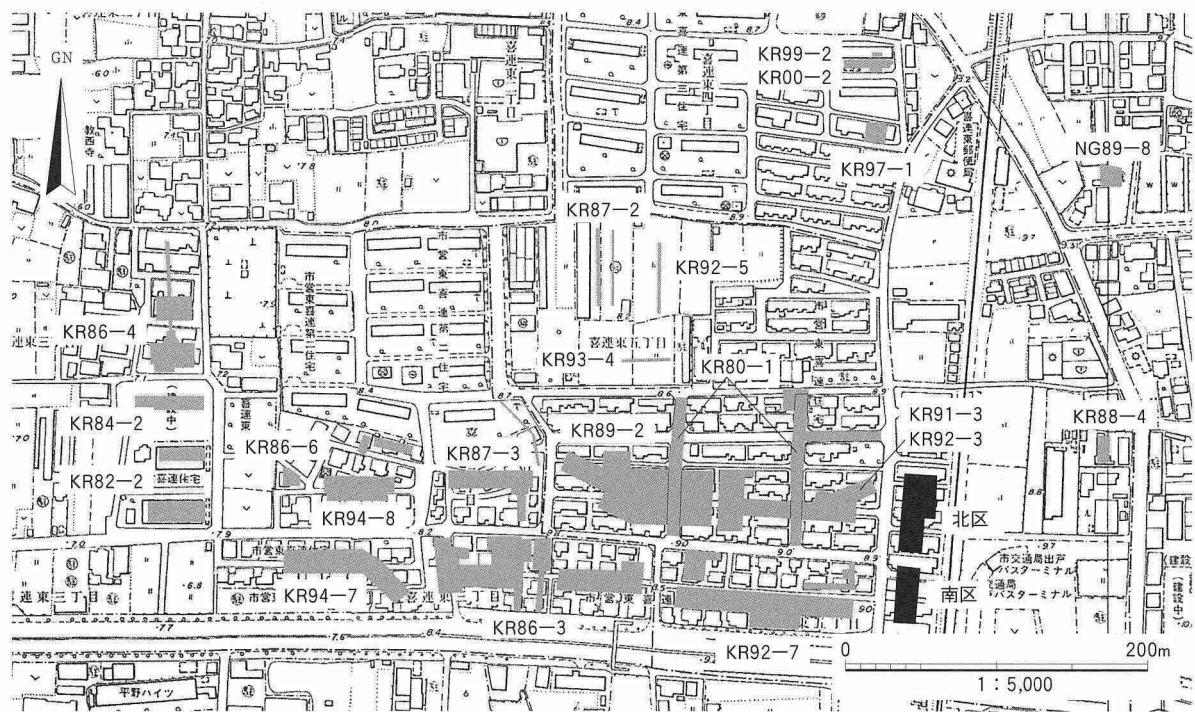


図5 喜連東遺跡の既往の調査地

表1 喜連東遺跡調査地一覧

番号	調査年度	次数	面積(m ²)	調査の原因	おもな遺構・遺物
1	1980	KR80-1	350	市道および下水道新設による工事	古墳時代:溝・埴輪、平安~室町時代:集落・瓦
2	1982	KR82-2	826	府営住宅建設による工事	飛鳥時代:溝、平安時代:水田、室町時代:溝・柱穴
3	1984	KR84-2	410	府営住宅建設による工事	谷地形確認、縄文時代:土器、弥生~古墳時代:土器
4	1986	KR86-2	260	府営住宅建設による工事	KR86-4次に先立つ試掘調査
5	1986	KR86-3	1,468	市営住宅建設による工事	古墳時代:溝・土壙、飛鳥時代:建物・溝、平安時代:井戸・土壙、鎌倉時代:建物・土壙、室町時代:墳墓堂・溝・井戸
6	1986	KR86-4	600	府営住宅建設による工事	弥生時代:方形周溝墓・古墳:方墳、室町時代:溝・瓦、江戸時代:粘土採掘場
7	1986	KR86-6	100	老人憩の家建設による工事	「馬池谷」の肩確認。縄文時代:土壙、室町時代:溝
8	1987	KR87-2	228	民間による工事	古墳時代:方墳
9	1987	KR87-3	870	市営住宅建設による工事	古墳時代:溝・土壙、飛鳥時代:建物・溝、平安時代:井戸・土壙、鎌倉時代:建物・土壙、室町時代:溝・井戸
10	1988	KR88-4	40	個人による工事	古墳~江戸時代:作土層
11	1989	KR89-1	10	市営住宅建設による工事	KR89-2次に先立つ試掘調査
12	1989	KR89-2	3,000	市営住宅建設による工事	古墳時代:溝・飛鳥~奈良時代:建物群・柵・溝、平安~室町時代:井戸・土壙・溝
13	1991	KR91-3	1,470	市営住宅建設による工事	奈良時代:建物・溝、平安時代:建物・土壙・溝・井戸・鎌倉時代:建物・井戸・溝、室町時代:堀・井戸
14	1992	KR92-3	730	市営住宅建設による工事	KR91-3次の拡張調査
15	1992	KR92-5	144	個人による工事	古墳時代:方墳・鉄刀・鉄鎌・堅櫛・埴輪
16	1992	KR92-7	2,210	市営住宅建設による工事	縄文時代:黒曜石製石鎌・古墳時代:溝・奈良~平安時代:建物・井戸・鎌倉時代:溝・室町時代:溝
17	1993	KR93-4	105	個人による工事	奈良~平安時代:柱穴・溝・江戸時代:島畠溝
18	1994	KR94-7	1,350	市営住宅建設による工事	谷地形確認、縄文~弥生時代:土器・古墳時代:錫装刀子・平安~江戸時代:耕作痕
19	1994	KR94-8	891	市営住宅建設による工事	古墳~奈良時代:溝・平安時代:井戸・室町~江戸時代:耕作痕
20	1997	KR97-1	180	市営住宅建設による工事	縄文~弥生時代:石器製作址・土器・平安時代:溝・土壙
21	1999-2000	KR99-2 -00-2	270	市営住宅建設による工事	弥生時代:方形周溝墓・木棺・土器棺・飛鳥~鎌倉時代:溝

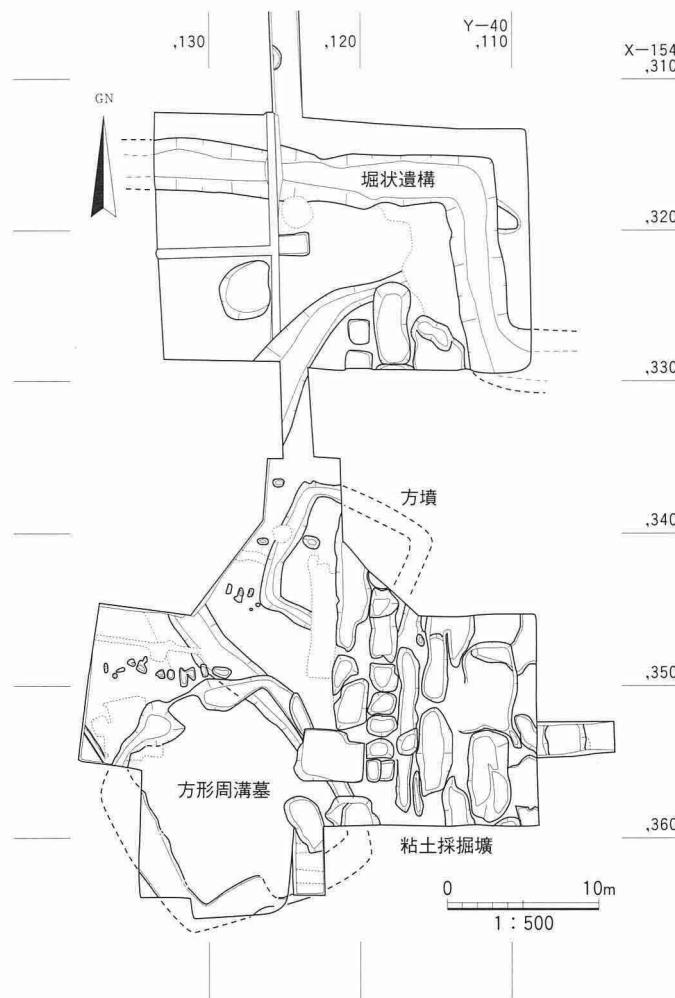


図6 KR86-4次調査検出の方墳・方形周溝墓など

1984年度にはKR82-2次調査地の北側で同じく府営住宅建替えに伴い、KR84-2次調査を行い、同谷の東肩を検出した。また、縄文時代晩期長原式に属する土壙を検出した[大阪市文化財協会1985]。

1986年度に行った調査はこれまで推測の域を出なかった遺跡の内容を明らかにするものであり、喜連東遺跡の名前を著名なものとする発見が相次いだ。遺跡西部では府営住宅建替えに伴い、試掘調査であるKR86-2次調査を経てKR86-4次調査(図6)を実施し、弥生時代後葉~末葉の方形周溝墓と古墳時代前期の方墳各1基を検出した[黒田慶一1987]。方形周溝墓は11.8m×10.8mの墳丘の両端に突出部を伴う特異な形状のものである。周溝からは壺・甕・手焙形土器が出土した。方形周溝墓の発見はこの地域に弥生時代の墳墓群が存在する可能性を示唆するものであった。

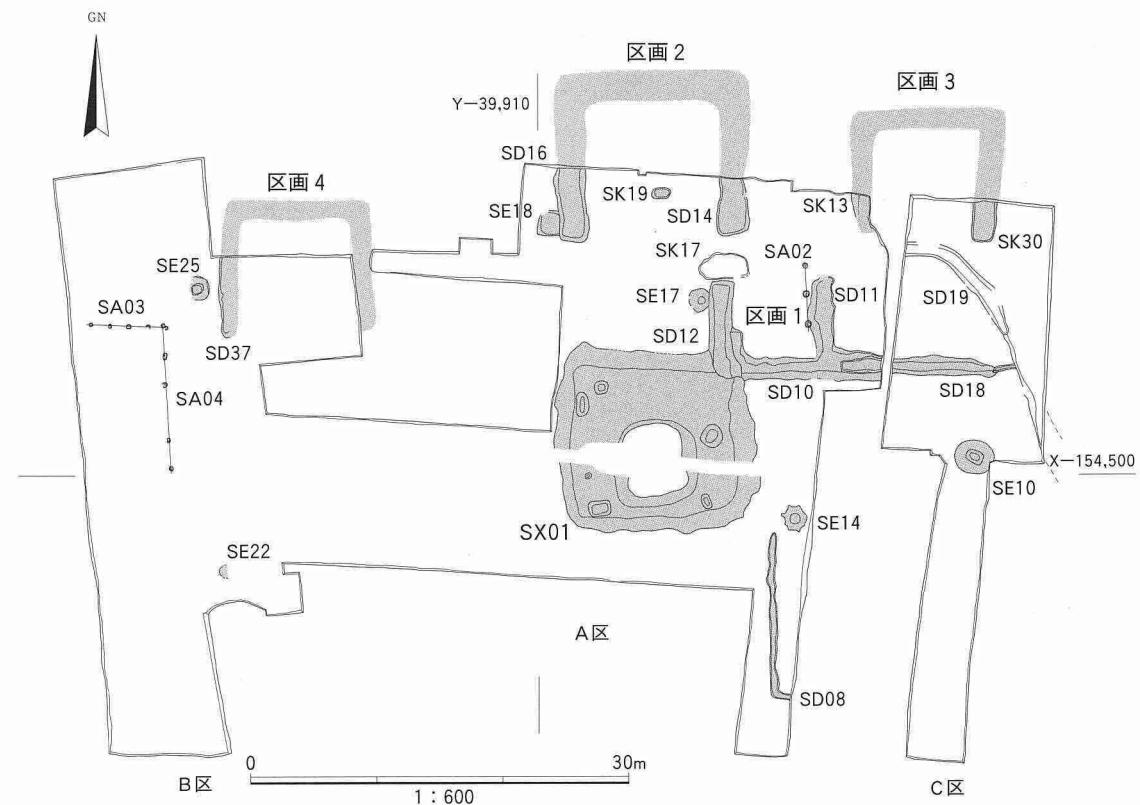


図7 KR86-3次調査検出の墳墓堂など([大阪市文化財協会1999]を改変)

方墳は一辺約7mで、土師器壺が出土した。古墳はこれまでも埴輪片の出土から存在を予測していたものの、喜連東遺跡においては初めての発見であった。また、この調査では16世紀中葉と考えられる堀状の遺構や江戸時代の粘土採掘場も検出した。同年には市営住宅の建替え事業も行われるようになり、遺跡南部ではこれに応じて調査を実施するようになった。KR86-3次調査(図7)では古墳～平安時代の遺構・遺物のほか、室町時代の墳墓堂跡を検出した[大阪市文化財協会1999]。墳墓堂跡は一辺6mの方形土段を溝で囲ったもので、溝内からは堂宇に用いられていたと推定される瓦が多量に出土した。瓦の年代観からは創建が平安時代後期までさかのほる可能性もある。墳墓堂跡と推定できる遺構は複数認められ、井戸とセットになっている点で興味深い。同調査では「馬池谷」の肩も確認している。「馬池谷」の肩はKR86-6次調査(図8)でも検出し、斜面では縄文晩期長原式の段階の土壙が見つかった[大阪市文化財協会1987]。

1987年度には2件の調査を行った。KR87-2次調査(図9)は遺跡北部での初めての調査である。細長いトレンチ調査であったが、4世紀末葉～5世紀初頭と考えられる方墳1基を検出した[黒田1987]。一辺約7mで周溝内から出土した埴輪は黒斑を有するものである。同年実

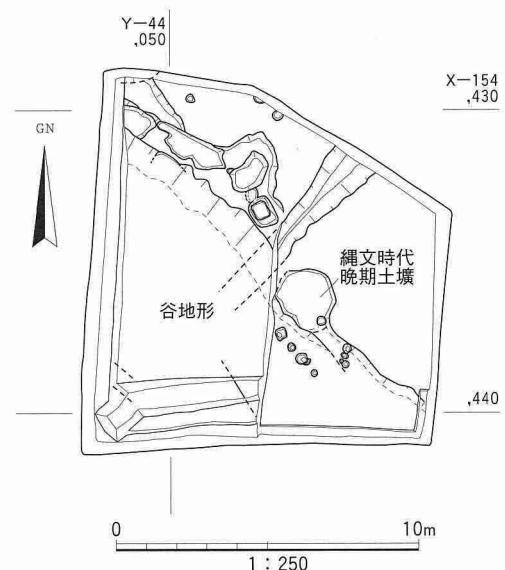


図8 KR86-6次調査検出「馬池谷」肩部

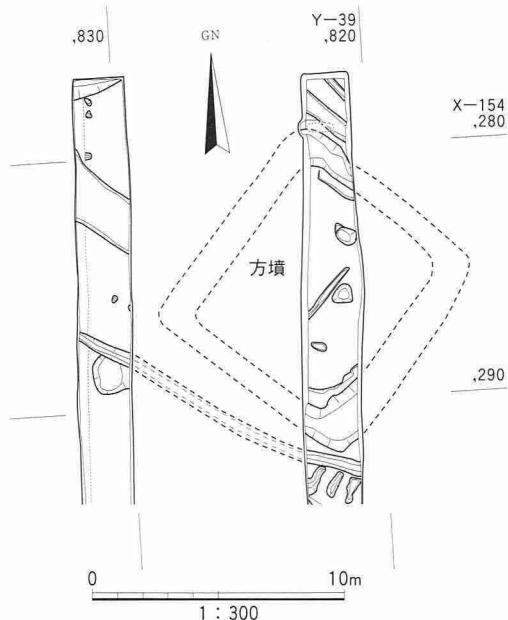


図9 KR87-2次調査検出の方墳

施したKR87-3次調査はKR86-3次調査の北にあたる。飛鳥～平安時代の建物のほか室町時代の建物、区画溝を確認しており[大阪市文化財協会1999]、南の墳墓堂群と同時期の遺構群として注目される。

1988年度には遺跡の東端にてKR88-4次調査を行った。小規模な調査であり、古墳～江戸時代の水田作土を確認したのみであるが、層中から多くの埴輪片が出土し、古墳群が広範囲に広がっている可能性を示唆した[大阪市文化財協会1988]。

1989年度には遺跡南部において重要な成果があがつた。市営住宅建替えに伴いKR89-1次調査を経てKR89-2次調査を実施した。飛鳥～奈良時代の遺構として柵と溝を伴う19棟もの建物群を検出した(図10)[京嶋覚・

西畠佳恵・上野裕子1990]。瓜破遺跡の柵と溝を伴う飛鳥時代の建物群[大阪市文化財協会2000a]の廃絶と軌を一にして出現しており、長原遺跡の水田経営を含んだ長吉台地東部の開発を考えるうえで興味深い資料となった。同調査では平安～室町時代にも多くの井戸のほか柱穴群・土壙・溝などを確認している。

1991～1992年度にかけては東接してKR91-3次調査(図11)を行った。奈良～室町時代の多くの遺構・遺物を確認したためKR92-3次調査として拡張調査も実施した。西部ではKR89-2次調査の奈良時代の建物群の続きを検出するとともに、建物群の東端と考えられる区画溝を確認している。平安時代後期～鎌倉時代の遺構としては多数の掘立柱建物がある。堀状の区画施設をもつとともに中

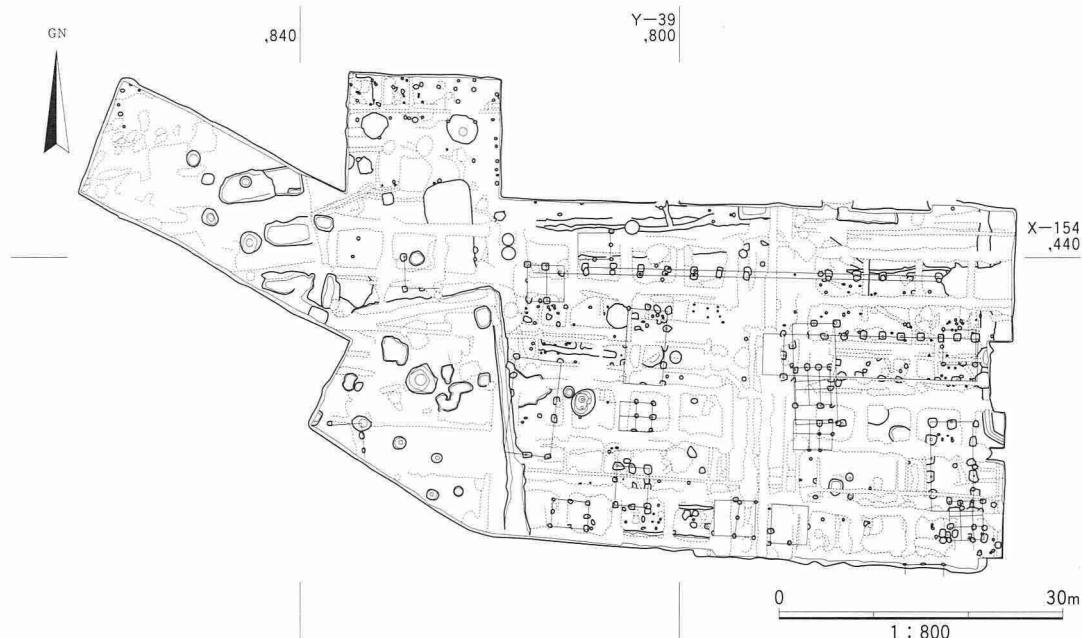


図10 KR89-2次調査検出遺構

国製白磁を多く出土するなど、一般集落とは異なる性格を想定させる資料となった。また、幅3.6m、深さ1mに及ぶ室町時代の堀を確認している。堀内からは平安時代後期から室町時代におよぶ多量の瓦を出土し、その様相はKR86-3次調査検出の墳墓堂群に類似する。礎石と考えられる人頭大の石が出土していること、周辺に柱穴が認められないことから堀で囲まれた内部には礎石を用いた瓦葺き建物が存在していたと考えられ、墳墓堂群と係わりの深い施設として寺院の存在を推定している[佐藤隆・田島富慈美・久保和士・板野史1992]。同調査では古代以降、大きな断絶なく遺構・遺物が検出されており、古代・中世を通じてこの地域の中心地であったと考えられる。同調査の南の敷地では1992年度にKR92-7次調査(図12)を行った。区画施設は検出できなかったものの奈良時代の建物群の南限と推定できる建物を検出した。平安時代前～中期の遺構としては大規模な井戸を、平安時代後期～鎌倉時代および室町時代の遺構にはKR91-3次調査のそれぞれの時期の堀の続きを確認してい

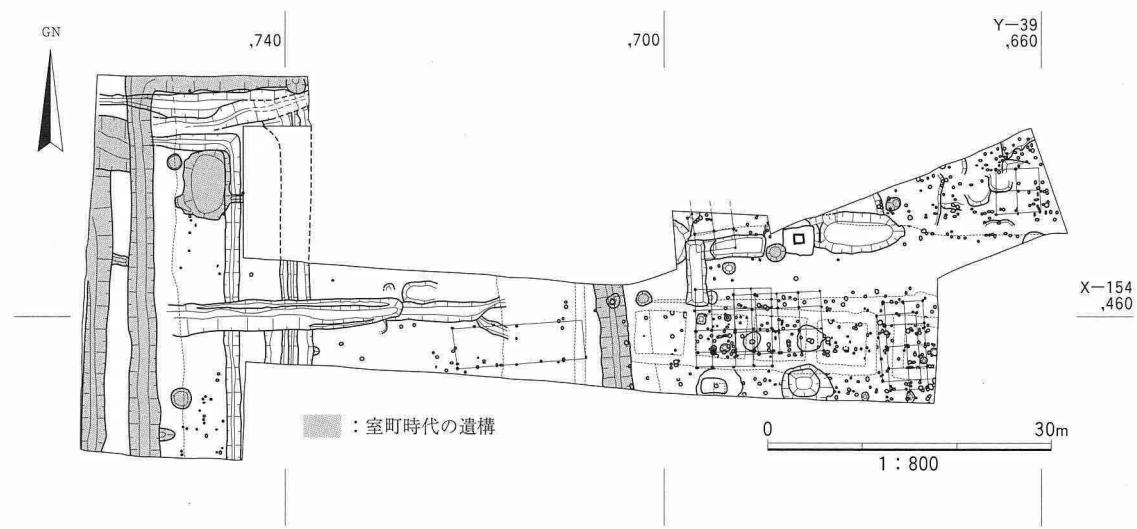


図11 KR91-3・92-3次調査検出遺構

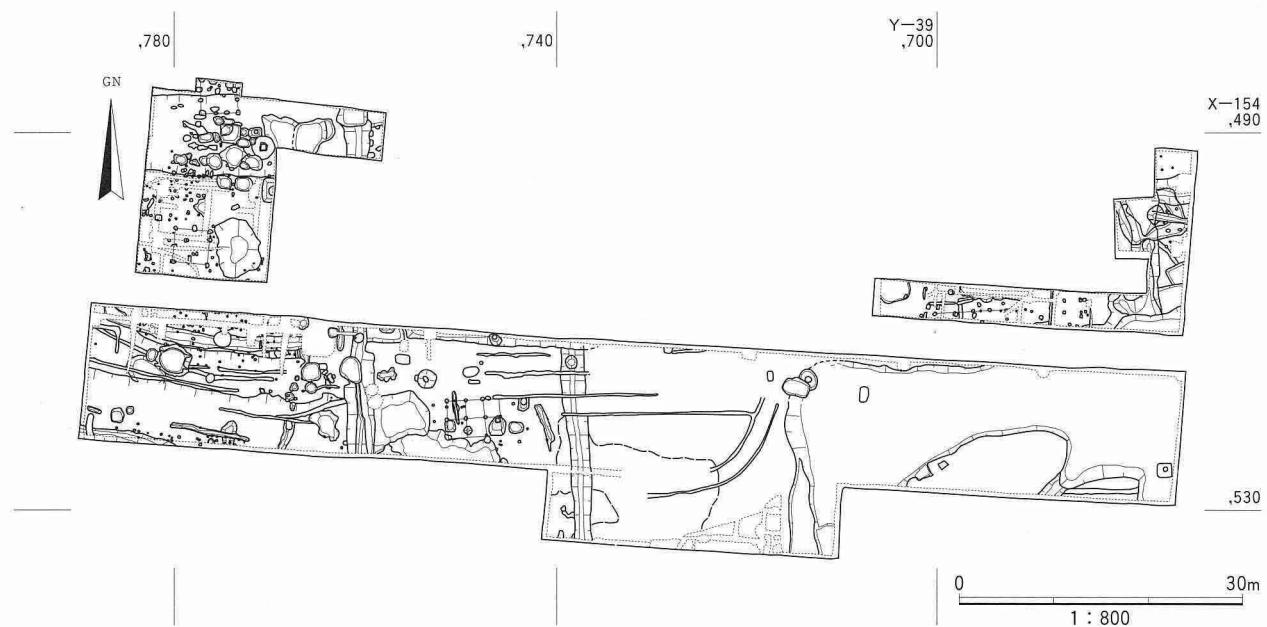


図12 KR92-7次調査検出遺構

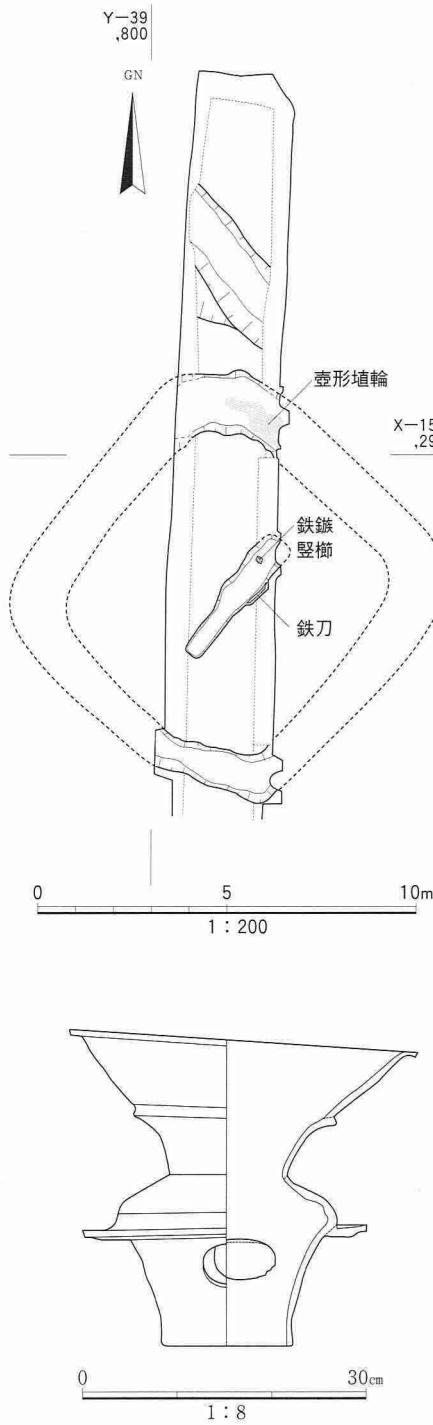


図13 KR92-5次調査検出方墳
および壺形埴輪

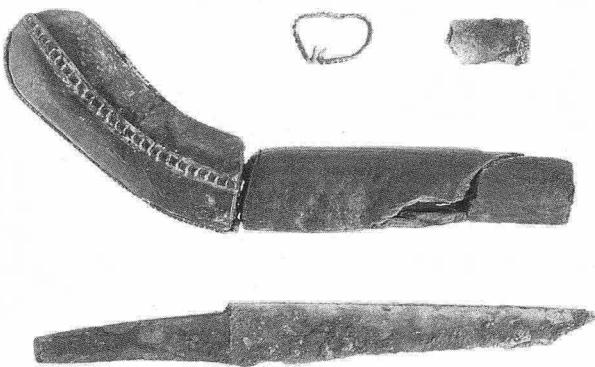


写真1 KR94-7次調査出土錫装刀子

る。同調査では、「山王塚」の記載がある一部も調査しており、性格は不明ながらも平安時代後期～鎌倉時代の構造物であることがわかった。また、市内では初の出土となる黒曜石製の石鎌も出土している[大阪市文化財協会1993a]。

同年には遺跡の北部においてKR92-5次調査(図13)を行い、幅狭いトレンチ調査ながらも4世紀末～5世紀初頭の方墳を確認している。墳丘長は一辺7.0～7.5mに復元できる。舟形木棺の可能性がある埋葬施設が残存しており、鉄鎌・鉄刀・豎櫛が出土した。埋葬施設は喜連東遺跡での初めての発見であった。周溝からは壺形埴輪が出土している[佐藤隆1993]。この成果によって西のKR86-4・87-2次調査と合わせ、喜連東遺跡には長原古墳群同様、小方墳を主体とする古墳群が分布しているという確証を得ることができた。また、古代にさかのぼる遺構は確認されず、南方で検出された奈良時代の建物群の広がりを探る意味でも貴重な成果であったといえる。

1993年にはKR92-5次調査の南でKR93-4次調査を実施した。小規模な調査であるが奈良～平安時代の遺構を確認した[大阪市文化財協会1993b]。このことから奈良時代の建

物群の北限は当調査地とKR92-5次調査との間にあるのではないかという想定が可能となった。

1994年には喜連東遺跡の古環境復元に重要な資料が得られた。遺跡南西端のKR94-7次調査では、「馬池谷」内部を沖積層基底まで層位的に調査することができた。また、合わせて自然科学的な分析を行った。縄文海進時の堆積層は河内平野で確認された中で最奥部に位置する。谷内は徐々に埋積が進み、縄文時代晩期には遺物量が増え一時的に人々の活動が活発になったことがうかがえた。谷内は古墳時代までは乾湿を繰返す安定した環境であったが、飛鳥時代の大規模な洪水により急激に谷が埋め

られたのちは人為的開発の強い環境となり、平安時代中期以降は耕作地として利用されていたことが判明した。古墳時代の遺物では細部に装飾を施した錫装刀子(写真1)という類例の少ない資料も出土している[久保和士・宮本康治1995、大阪市文化財協会1995a]。同調査地の北ではKR94-8次調査を実施し、平安時代の井戸群を検出している[大阪市文化財協会1995b]。

1997年には当時の遺跡範囲よりわずかに北に外れた地点で市営住宅の建替えに伴いKR97-1次調査を行った。平安時代の遺物が多数出土とともに古墳時代以降はおもに耕作地として利用されていたことが判明した。また、縄文時代晚期～弥生時代終末期相当の地層が遺存し、遺物のほか縄文時代の石器製作址と推定できる遺構も検出した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]。このことから喜連東遺跡の範囲がさらに北側に広がることが予測された。

1999～2000年にかけては今回報告の調査のほか、KR97-1次調査よりさらに北側の地点で市営住宅の建替えに伴ってKR99-2・00-2次調査(図14)を実施した。この調査では弥生時代後期初頭の大規模な方形周溝墓を検出した[大阪市教育委員会・大

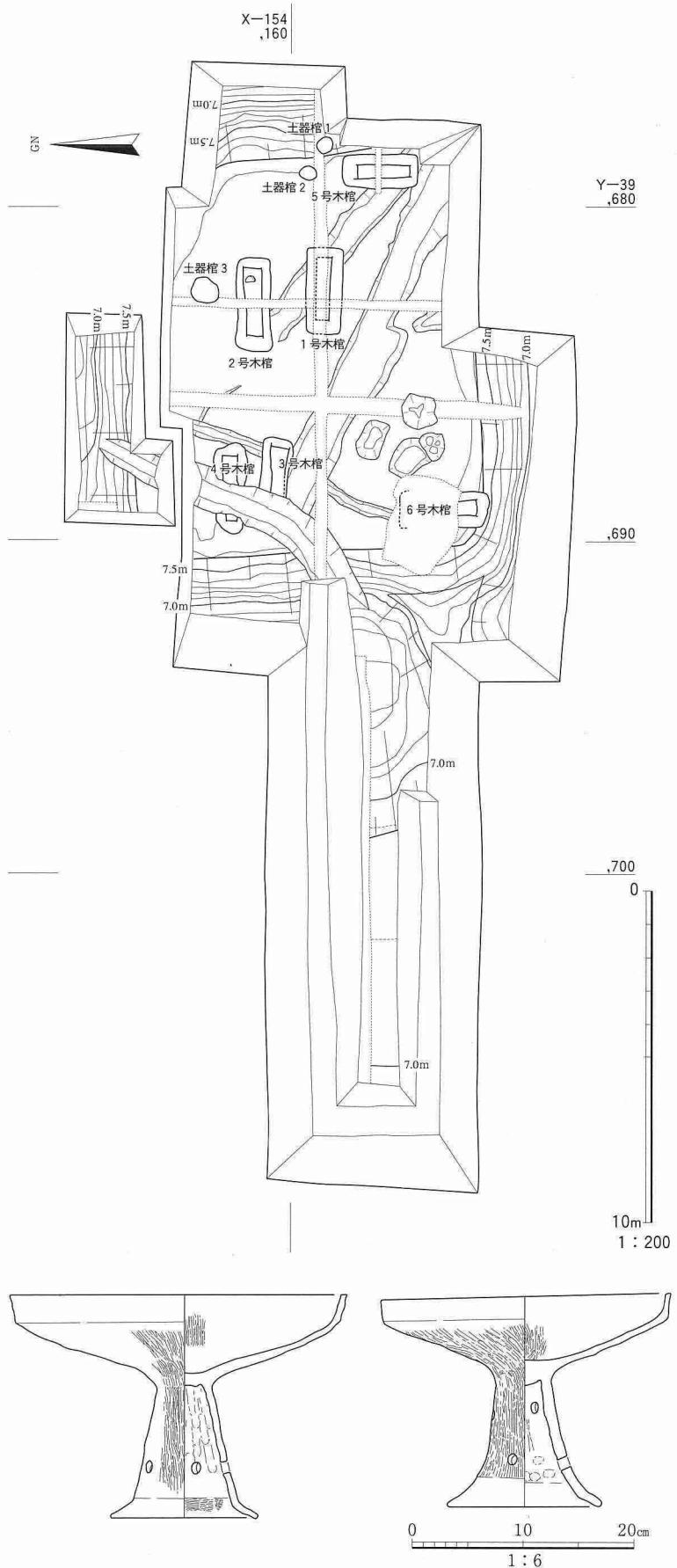


図14 KR99-2・00-2次調査検出方形周溝墓および出土土器

阪市文化財協会2001・2002、平田洋司2000]。墳丘は裾部で14.5m×13.0m、高さは0.8mが遺存していた。埋葬施設として木棺6基・土器棺3基がある。標石と推定できる花崗岩のほか高杯・鉢などの供獻土器を伴い、棺内には赤色顔料の使用が認められた。後期初頭の方形周溝墓の類例は大阪平野において数少ないものであり、貴重な成果であった。また、十分に調査することはできなかったが、古墳～鎌倉時代の水田や溝なども検出している。KR97-1次調査結果ともあわせ喜連東遺跡の範囲が北側に広げられることとなった。

以上のように喜連東遺跡における調査件数は市内の他遺跡と比較して決して多いとはいえない。また、遺構面が高く各時期の遺構が同一遺構面で検出されるなど、時期の判定に慎重にならざるを得ないものもある。しかしながら条件に恵まれているとすれば公営住宅を主体とする比較的大規模の面積が多いことがあげられ、各時期の集落の広がりや変遷が掴めつつあることである。喜連東遺跡の調査はまったく不明な状態から開始したものであり、調査を行うごとに新たな成果があがっている。遺跡北部を中心として未調査の箇所も多く残されており、今後の調査の進展により、遺跡のさらなる解明が進むと期待できる。

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 調査の概要

調査は前述のように北区・南区に2分割して行った。北区では比較的地層が良好に遺存する一方、南区については大きく削平を受け、現代による攪乱も多く存在していた。地層・遺構の遺存状況は両地区で大きく異なっていたものの、遺構面から鎌倉時代以前、室町時代、江戸時代の大きく3つに分けうる。鎌倉時代以前については出土遺物からさらに細分することも可能であるが、同一面での検出であり、時期が不確定な遺構も含まれることから一括して扱い、必要に応じて時期決定を行うこととする。以下、時期ごとにその概略を記す。

鎌倉時代以前

遺物としてもっとも古いものとしては、遊離資料であるが、後期旧石器時代のナイフ形石器が1点出土した。北区北半においては旧石器時代を対象とした調査を試みたが、遺構・遺物ともに検出することはできなかった。縄文～弥生時代の遺物としては、同じく遊離資料であるが石鏃がある。さまざまな型式があり、集中は認められない。

遺構としては北区で検出した5世紀代の方墳2基が最古である。遺存状況は悪く、周溝を残すのみである。埴輪片は両区から出土しており、近隣にさらに古墳が存在していた可能性がある。

飛鳥～奈良時代の遺構と推定できるものには溝群がある。耕作などの水利に係わるものであろう。この時期の遺物量は少なく、集落からは少し離れた場所であったと考えられる。

平安～鎌倉時代の遺構には掘立柱建物1棟と土壙があり、おもに南区で認められた。時期が確定できるものはすべて平安時

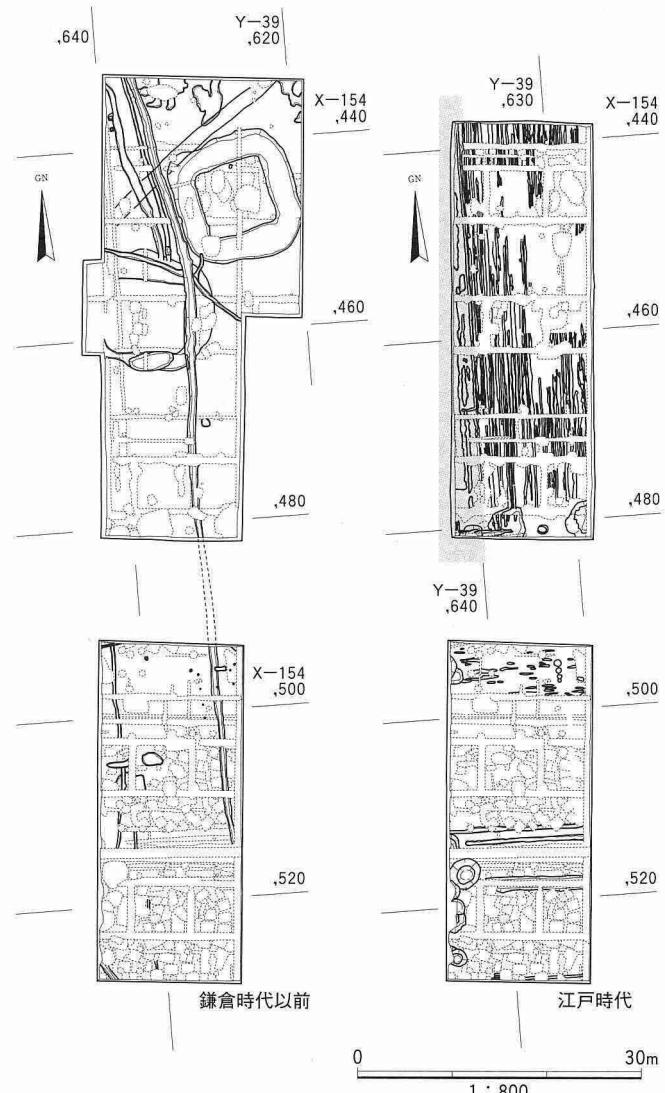


図15 遺構変遷図

代である。北区で検出した2条の平行する小溝も同時期の可能性がある。調査地全体として見ると平安時代の遺物は一定量出土していることから、集落の一部であったと推定しうる。遺構の遺存状況は概して悪いとはいえ、地層の遺存が良好であった北区で遺構が希薄であったことから、西側での既往の調査(KR91-3・92-3次調査)に見られるように建物群が密集するという状況ではなく、集落の周縁部という様相がうかがえよう。

室町時代

確実に室町時代に属する遺構は検出できなかった。しかしながら、同時代と考えられる層準が作土層であることから、調査地は耕作域として利用されていたようである。江戸時代とした井戸群の中には掘削が室町時代にさかのぼるものもある可能性がある。KR91-3・92-3次調査では寺院に係わるとも推定できる堀状遺構などが確認されており、両調査地間を境として土地利用が異なっていたと推定できよう。遺物としては細片が多いが、土師器・瓦器のほか白磁・青磁・瓦などが出土しており、量は少ないものの遺物の様相としては、西の調査地と同様である。

江戸時代

両区で井戸・溝のほか耕作に係わると推定される小溝群が検出された。遺構の切合いからは大きく2時期に区分することができる。まず、北区の西側に段が造られ、段の上下で小溝群が掘削される時期がある。この段を境として東西異なった区画であったと推定できる。次に段が消滅し、調査地全域に小溝群が掘削される時期である。井戸にはこれら的小溝群の掘削に先行して埋められたものもあり、小溝群の掘削に先立って使用されていた可能性も否定できない。分布としては北区の南端、南区の西端に集中する。また、小溝群の方位は北区で南北方向、南区で東西方向であり、両区で異なった区画であったと推定できる。南区では東西方向の溝を複数検出した。これらは小溝群に比べ幅広であり、区画施設と考えられる。これらのことから江戸時代においては、調査地の区画は調査地とその西側で大きく東西に区分され、北区と南区の間および南区ではさらに東西方向の溝により、南北に区画されていた可能性が高い。今回報告は割愛するが、現代耕土下面で検出した小溝群の向きも江戸時代と一致している。また、南区で検出した幅広の溝上に重なって埋設管が設置されていることから、この区画は現代にほぼ引き継がれているといえよう。

第2節 層序

調査地の現地表面の標高はおおよそTP+9.0mと平坦であるが、地山層である第7層上面では南区でTP+8.6m、北区でTP+8.1mと緩やかに北へ下がっている。各地層の遺存状況も南区で現代盛土直下で地山層が検出される部分がある一方、北に行くほど良好である。また、南区では無数の攪乱のため、地層の分布は断続的である。

第1層 現代盛土および攪乱で、層厚は平均で約50cmある。現代盛土は市営住宅建設時の整地層に対応できる。南区では本層直下で地山が検出される個所もある。長原基本層序[趙哲済1995]の長原0層に相当する。

第2層 黒色砂質シルトからなる現代作土層で層厚15cmある。長原1層に相当する。断面からの観察であるが、本層上面には南北方向の畝および畝間があり、市営住宅建設直前には畠として利用されていたことがわかる。本層下面では耕作痕跡と考えられる小溝群が検出された。

第3層 灰褐色粗粒砂質シルトからなる作土層で層厚10cm程度である。出土遺物の多くは下層に由来する土師器・須恵器・瓦器片であるが、唐津焼・肥前系磁器などの国産陶磁器を含み、江戸時代に位置づけられる。長原2層に相当する。層内および下面では井戸・溝のほか耕作に伴うと考えられる小溝群を検出した。

第4層 黄褐色粗粒砂質シルトからなり、層厚10cm程度である。北部では作土層として明瞭に下層と区別しうるが、南部では風化により識別困難な場所もある。出土遺物は下層に由来する土師器・須恵器・黒色土器が多いが、瓦器のほか白磁・青磁など輸入磁器を含み、室町時代に位置づけられる。長原3層に相当する。顕著な遺構は確認できなかった。

第5層 黒褐色シルト質粗粒砂で北区北半にのみ層厚10cm未満で遺存する。土師器・須恵器・黒色土器のほか少量ながら瓦器を含み、古墳～鎌倉時代に位置づけられる。長原4～7層に相当する。層内および基底面では古墳・掘立柱建物・溝・土壙などを検出した。

第6層 黒褐色シルト質粗粒砂層で方墳SX501の墳丘にのみ層厚5cm以下で部分的に遺存する。古

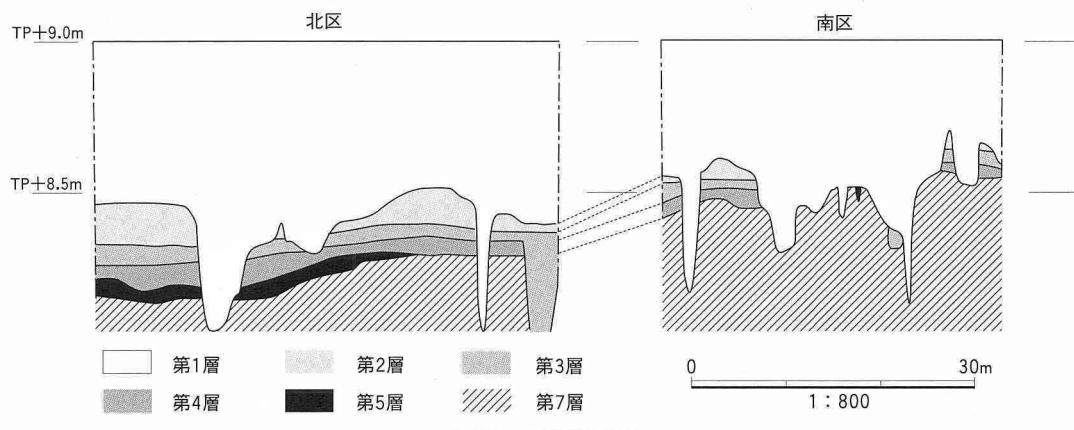


図16 層序概念図

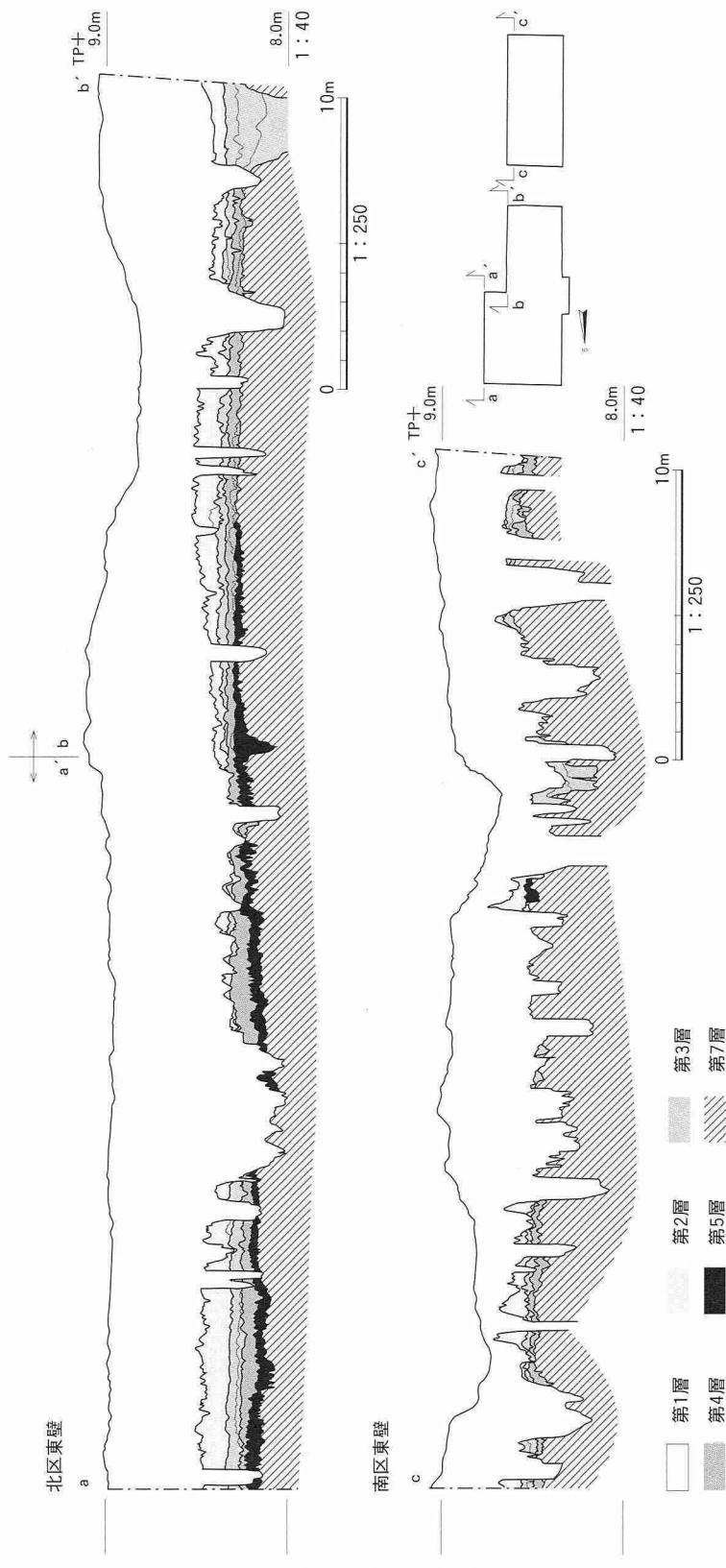


図17 地層断面模式図

墳時代に位置づけられ、長原7B層に相当する。遺物・遺構は検出できなかった。

第7層 黄色シルト質粘土～砂礫からなる地山層である。長原13層以下に相当する。長原13層に対比できる黄褐色シルト質粘土層は北区北半にのみ遺存する。この部分を対象に旧石器時代の遺構・遺物の検出を試みたが、ともに検出できなかった。

第3節 鎌倉時代以前の遺構と遺物

北区北半には長原13層に対応する地層が遺存していたため、旧石器時代を対象にした調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

遺構の検出は第4・5層基底面においてである。北区北半では第5層基底面、以南では第4層基底面検出遺構である。検出面のベースとなる地山層の標高は北に行くほど緩やかに下がっている。遺構の残存状況も北に行くほど良好で、南では悪い。検出した遺構には方墳2基、溝12条以上、掘立柱建物1棟、土壙10基以上などがある。古墳時代から鎌倉時代まで時期幅が存在するが、遺構の中には出土遺物が少なく時期が不明なものもあるため一括して記すこととする。また、遊離資料ではあるが旧石器～弥生時代の石器遺物も出土している。

1) 遺構と遺物

i) 古墳(図20～22、原色図版、図版4・5・10)

北区で方墳2基を検出した。いずれも墳丘の遺存状況は悪く周溝を残すのみで、埋葬施設は確認できなかった。

SX501 北区北半で検出した方墳である。墳丘は一辺7.3～7.5mで、築造時のベースに相当する第6層が一部層厚5cm未満で遺存するほかは盛土は遺存していない。周溝は幅2.8～3.5mで深さはもっとも残りのよい部分で0.4mある。周溝の傾斜は墳丘側が急のに対し外側で緩やかである。周溝埋土は大きく2層に分かれ、下層は地山偽礫を多量に含むことから周溝掘削時の再堆積土と考えられる。本層上面までの深さはもっとも深い部分で検出面より0.3mある。図示した等高線は本層上面のものである。上層は機能時の堆積土で、遺物の多くは本層に含まれる。遺物には土師器・須恵器・埴輪があり、周溝南東コー

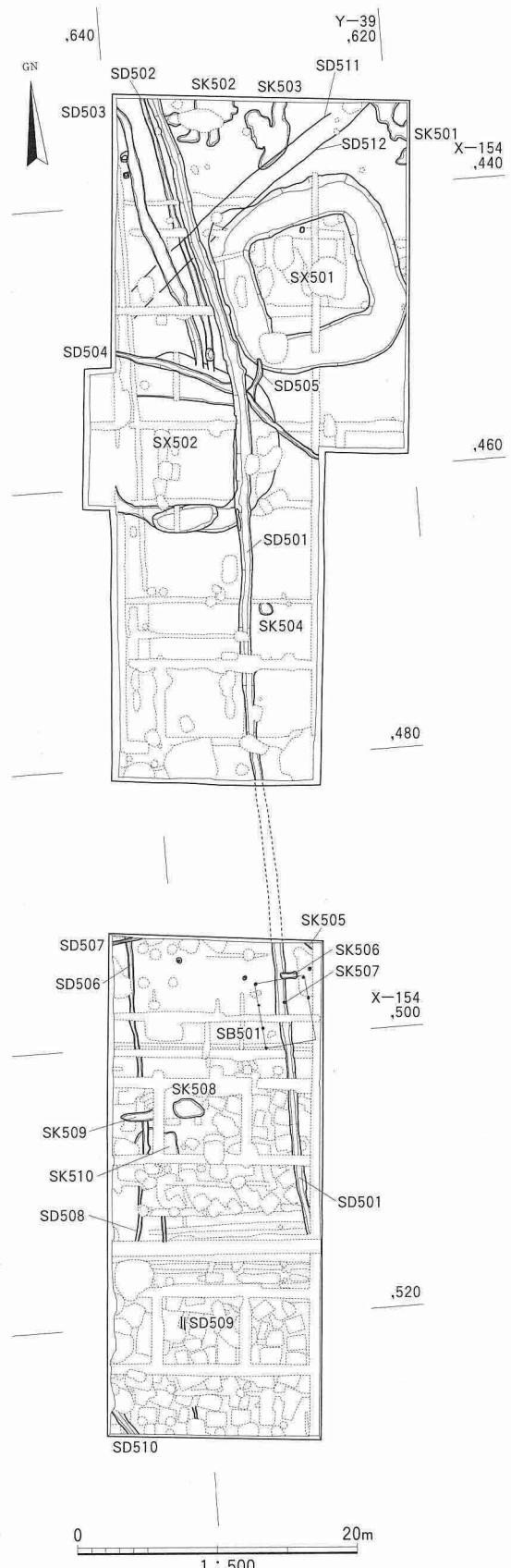


図18 鎌倉時代以前の遺構

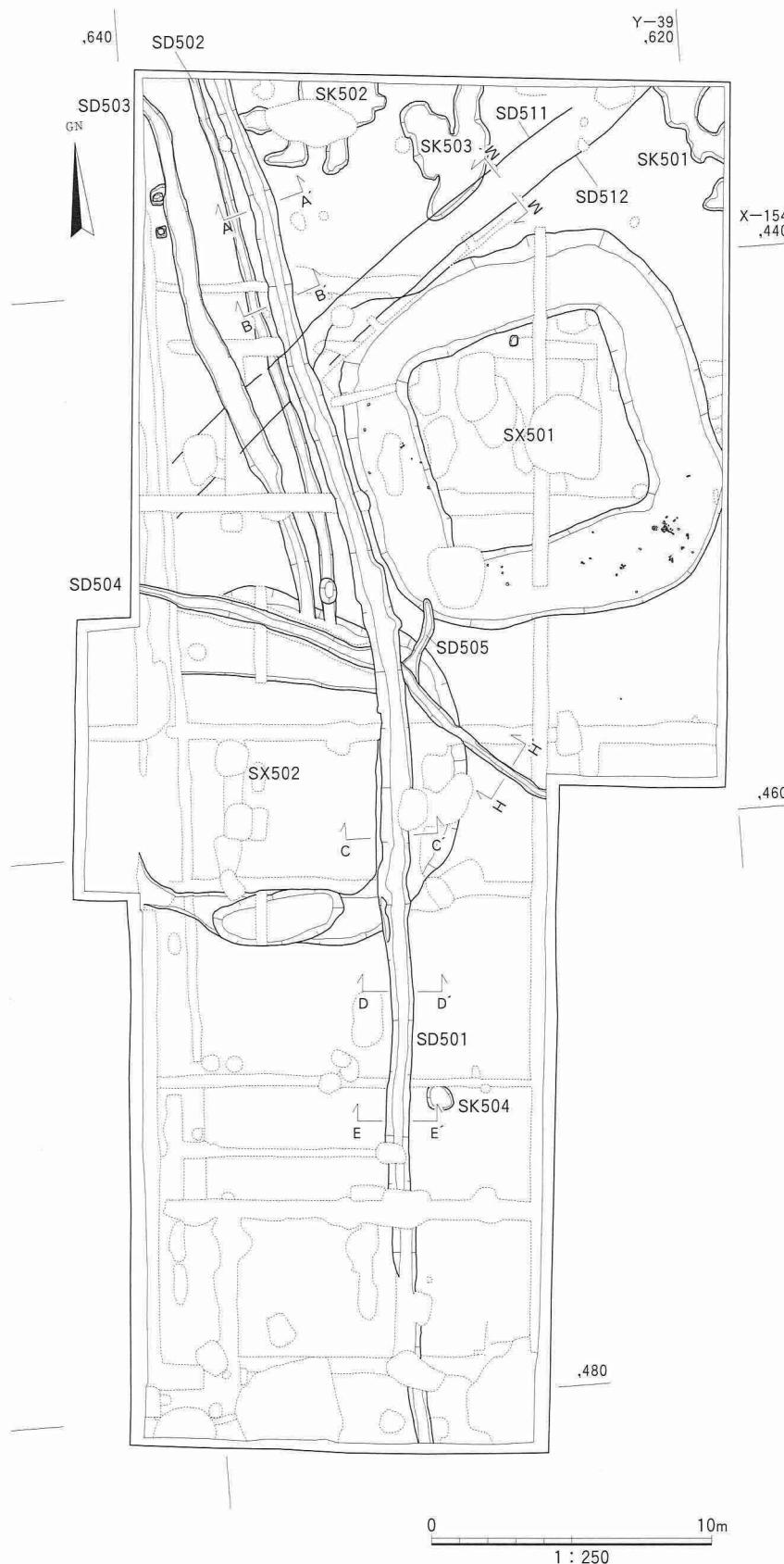


図19 北区鎌倉時代以前の遺構

間に波状文を巡らせている。7・8は筒部で7の肩部および筒部との境は凹線で区分される。肩部には刺突文、筒部には波状文を巡らせている。筒部には四方に長方形のスカシ孔を有する。8は浅い凹線

一部より比較的まとめて出土した。飛鳥時代に降る遺物も含まれることから、周溝は飛鳥時代までは埋没していなかったと考えられる。また、第5層以上から出土した埴輪片もSX501近辺に中心があることから本来はSX501に伴っていた可能性がある。

1~10は須恵器である。

1~3は杯蓋でこのうち2は高杯の蓋であろう。1は口径13.2cmで稜は鋭く、口縁端部は凹線状に凹む。2は平坦な天井部に扁平なつまみを有する。天井部には自然釉が掛かり、高杯と考えられる別個体が溶着している。3はかえりを有する杯蓋で口径10.4cmある。

4は無蓋高杯である。杯蓋を逆位にした形態で口縁部は外反し、口縁部と杯部との境には稜を有する。

5~9は器台で6は高杯形、5・7~9は筒形である。焼成から7~9は同一個体の可能性もある。5は杯部に3条以上の波状文を巡らせる。6は外反し、端部をつまみあげた口縁部を有する。2条1単位の稜線

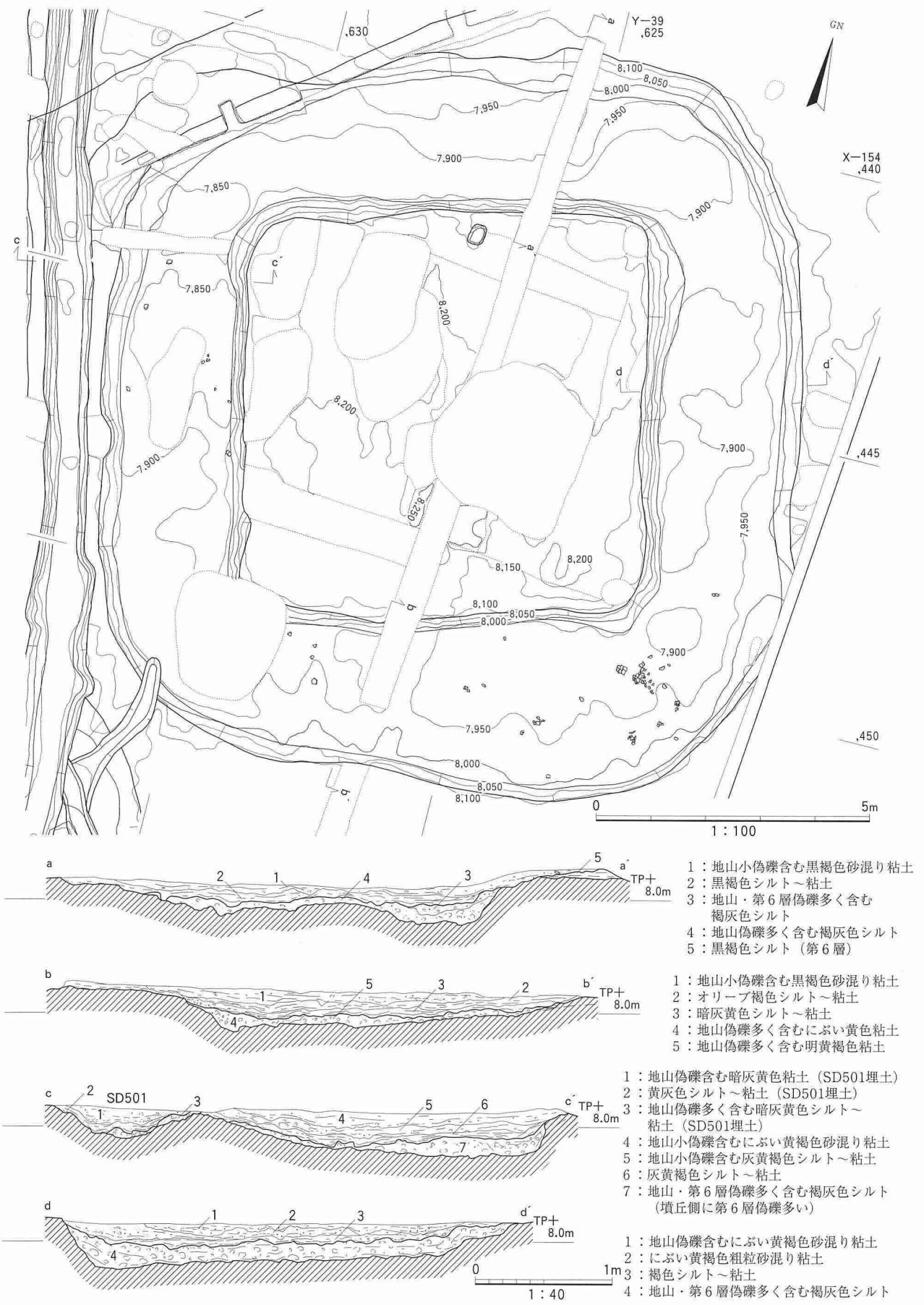


図20 SX501平・断面図

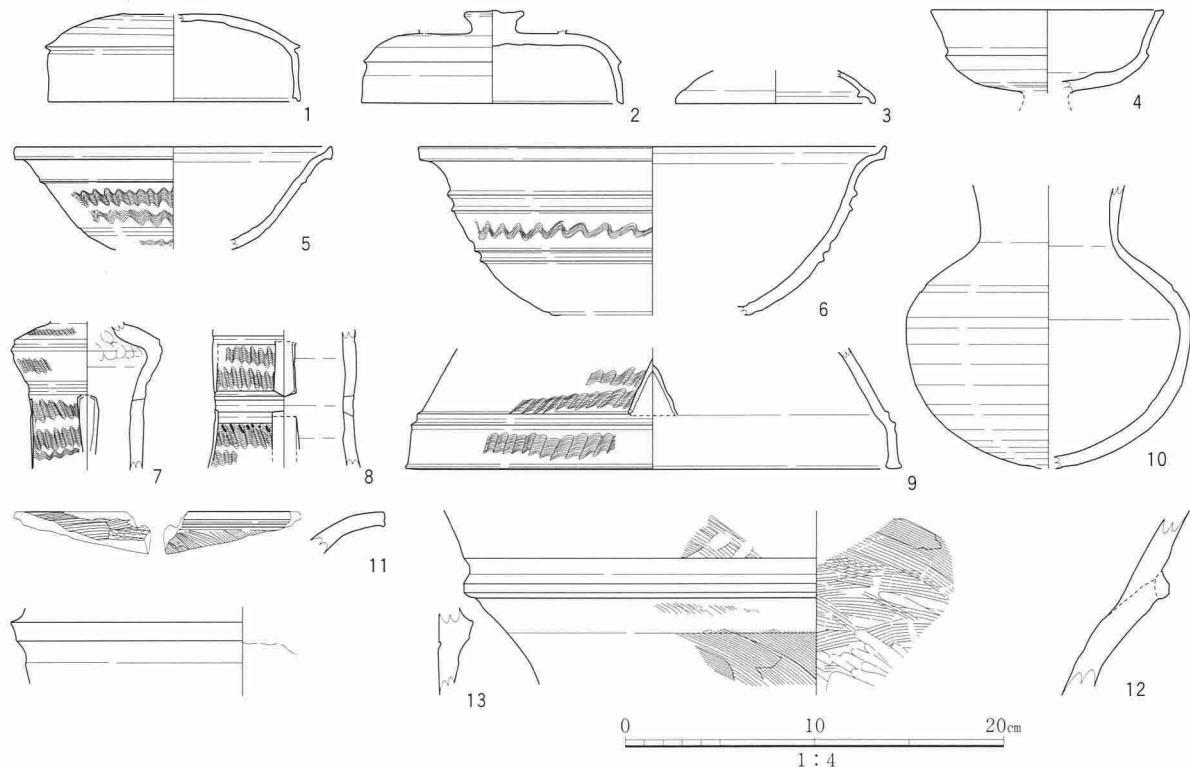


図21 SX501出土遺物

によって筒部が区分され、波状文が巡らされている。四方には長方形のスカシ孔を有する。9は脚裾部で直線的に開き、ほぼ垂直に下がる脚端部は拡張ぎみに稜をもつ。裾部および脚端部外面には波状文が施される。裾部下端には三角形のスカシ孔が穿たれているが、小片のため数は不明である。

10は壺で、肩部に浅い凹線を巡らせてている。

これらの須恵器は3を除きおおむねTK208型式に位置づけられ、古墳の築造時期を示すものであろう。飛鳥Ⅲに属する3は周溝の最終的な埋没年代を示すと思われる。

11～13は埴輪で11・12は朝顔形埴輪、13は円筒埴輪である。いずれも細片であるため径は図示したものと多少異なる可能性がある。土師質であるが黒斑は観察されない。概して遺存状況は悪く、不明瞭な部分が多いが、タガの形状はあまり高くない断面台形である。調整の残る11・12は内外面ともにナナメ方向のハケを施している。

土師器には甕体部片が出土しているが細片のため図化できない。須恵器には内面を磨消した甕体部片もある。また、3と同じく飛鳥時代に降る須恵器片も出土している。

以上のことからSX501の築造は5世紀後半であり、周溝は7世紀中葉ごろまでは埋没していなかつたと考えられる。

SX502 北区中央にて検出した方墳である。遺存状況は悪く西端は削平のため検出できなかった。墳丘は一辺7.3～7.8mで、盛土および築造時のベースである第6層は遺存していない。周溝は幅2.0～3.3mで、深さはもっとも残りのよいところで検出面より0.2mある。周溝埋土はSX501と同様大きく2層に分かれる。上層の機能時堆積土は削平のためほとんどの場所で薄いか、もしくは検出されなかつた。遺物には土師器・埴輪片がごく少量あるのみである。SX501との先後関係は明らかでないが、

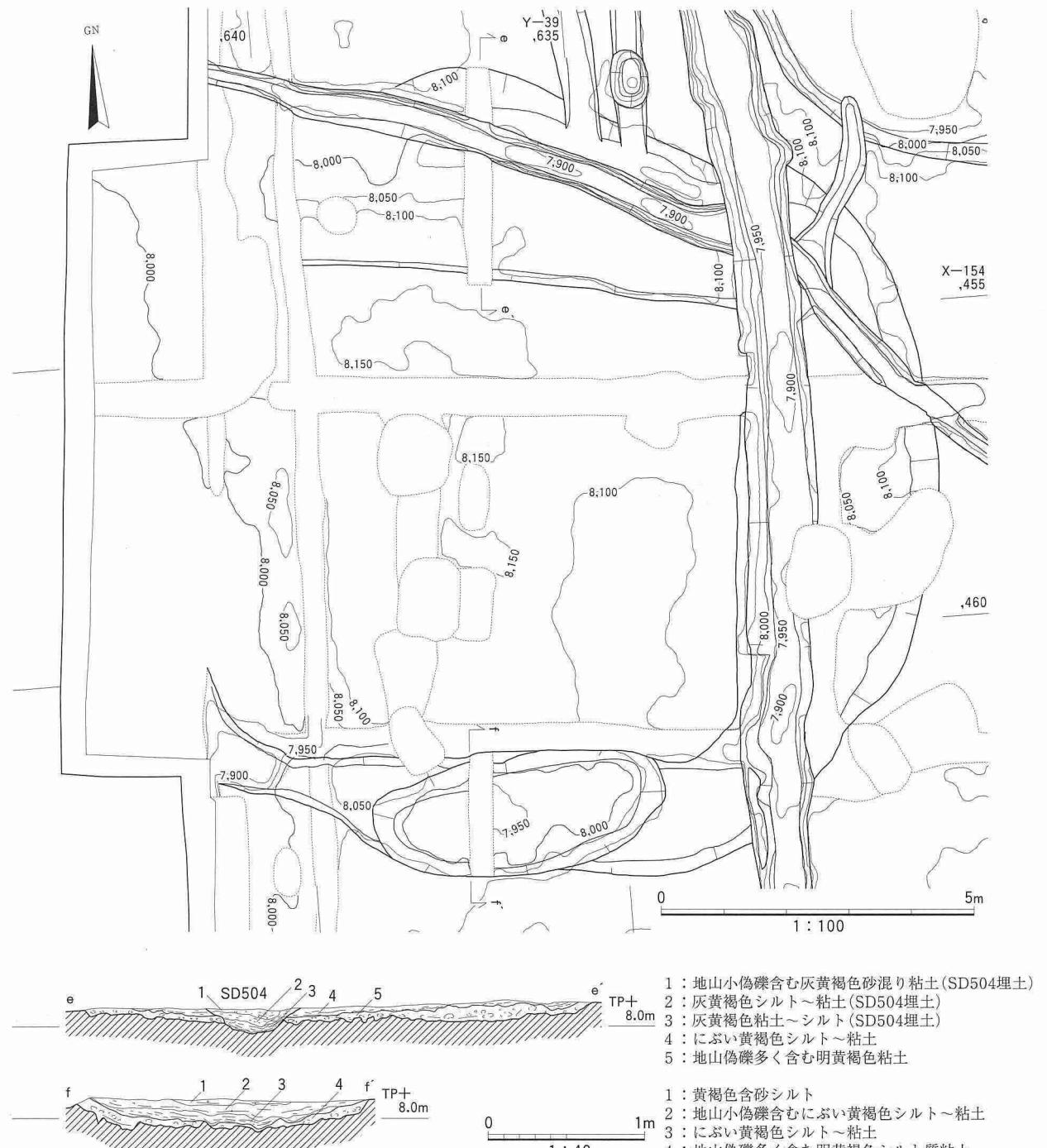


図22 SX502平・断面図

位置関係から同じく5世紀代と推定される。

ii) 溝群(図23~25、図版5・10)

北・南区とともに多くの溝を検出した。

SD501 北区から南区にかけて延長83m分を確認した。方位はおおむね南北方向であるが、北部では北で西に振る。この方位の振れはSX501・502に影響された可能性がある。幅0.6～0.8m、深さ0.3mある。切合い関係からSX502・SD504より新しくSD511・512・SK506・507より古い。底のレベルは北に向かって緩やかに下がっている。埋土は大きく3層に分かれ、下層は地山の偽礫を多く含む

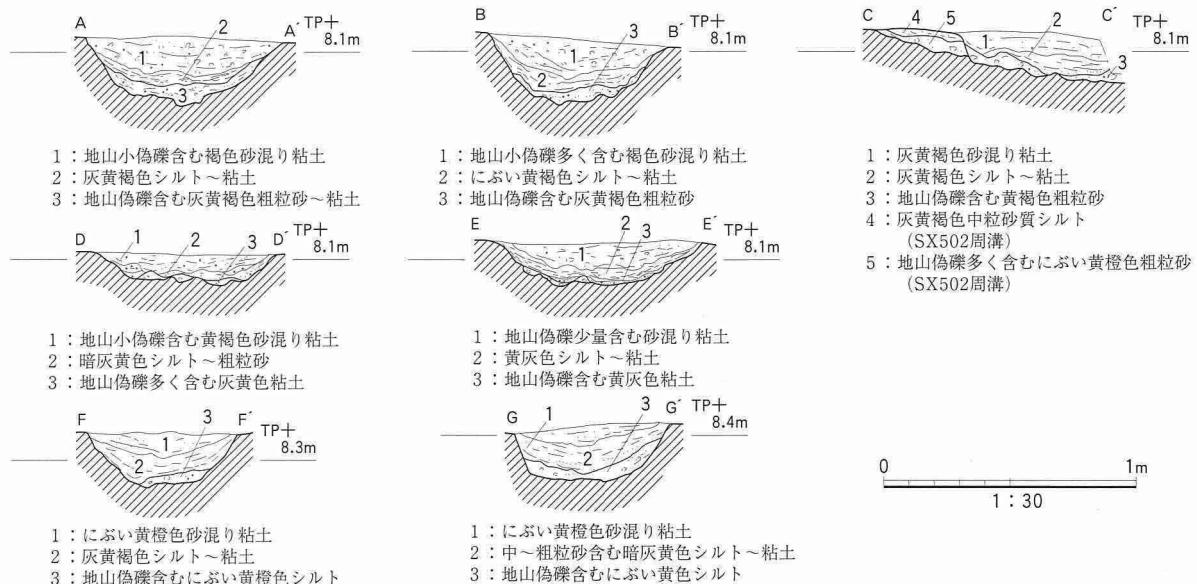


図23 SD501断面図

掘削時の再堆積土、中層は機能時の堆積層、上層は偽礫を含む人為的な埋戻し土である。機能時堆積層には下部を中心に水流の痕跡が認められる。

出土遺物には土師器・須恵器があるが、本来の時期を示しているとはいえない。

14は須恵器高杯蓋である。口径13.5cmで、天井部と口縁部との境の稜は鋭い。つまみの上部は丸く凹んでいる。15は須恵器杯身で高杯の可能性もある。立ち上がり端部は欠損している。体部下半にはカキメが施されている。これらの須恵器はTK208型式に属するものであるが、溝の時期を示すものではない。14についてはSX501に係わる遺物の可能性もある。

SD502 後述のSD503とともにSX502の北側周溝より北で検出した。SD501に平行し、方位は北で西に振る。幅0.4m、深さ0.05mと浅い。底のレベルは緩やかに北に向かって下がる。埋土は地山偽礫を少量含むシルトである。

出土遺物は土師器・須恵器・埴輪があるが、本来の時期を示すものではない。

SD503 SD501に平行し、方位は北で西に振る。幅0.5～1.5m、深さ0.1mある。底のレベルは北に向かって緩やかに下がる。埋土は地山偽礫を含む砂混り粘土である。

出土遺物には土師器・須恵器片がある。

SD504 北区中央で検出した北西～南東方向の溝である。SD505より新しくSD501より古い。幅0.5～0.9mでSX502の周溝部分では幅広となる。深さ

はもっとも深い部分で0.15mで、北西へと緩やかに下がっている。埋土は大きく2層に分かれ、下層は自然堆積土、上層は偽礫を含む人為的な埋戻し土である。

出土遺物には土師器・須恵器・埴輪があるがごく少量である。

SD505 北区中央にて検出した。SX501とSX502の周溝をつなぐような位置にあり、北で東に振る。幅0.4m、深さ0.05m未溝である。

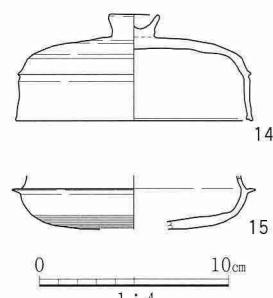


図24 SD501出土遺物

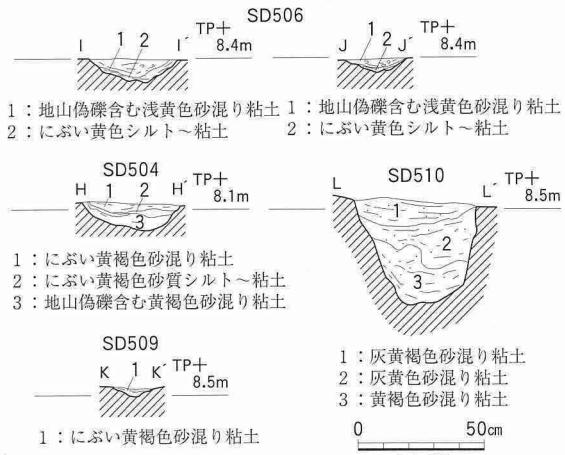


図25 溝群断面図

遺物は出土しなかった。

SD506 南区西側で16m分を確認した。方位はおおむね南北方向である。南ではSD508と同一であると考えられるが、途中に攪乱があるためSD509と同一である可能性も否定できない。幅0.4m、深さ0.1m未満で、底のレベルは緩やかに北に下がる。埋土は場所により大きく3層に分かれ、下層は地山の偽礫を多く含む掘削時の再堆積土、中層は機能時の堆積層、上層は偽礫を含む人為的な埋戻し土である。

出土遺物は土師器片があるのみで直接時期を決することはできないが、SK509・510に切られることから平安時代以前に位置づけられる。

SD507 南区北西端で一部のみ検出した。方位はSD506に直交し、切合い関係からSD506より新しい。幅0.2m、深さ0.05m未満で、埋土はSD506に類似する。

土師器・須恵器小片が出土したのみである。

SD508 南区中央部で検出した。北で東に振る方位をもつ。幅0.4m、深さ0.1m未満で埋土の色調はSD506と同様である。位置関係からSD506に連続する可能性がある。

土師器細片が少量出土したのみである。

SD509 南区中央部以南で検出した。方位はおおむね南北方向である。幅0.3m、深さ0.05m未満である。

遺物は出土しなかった。

SD510 南区南西端で検出した。一部のみの検出であるが、方位は北で西に振る。幅0.6m、深さ

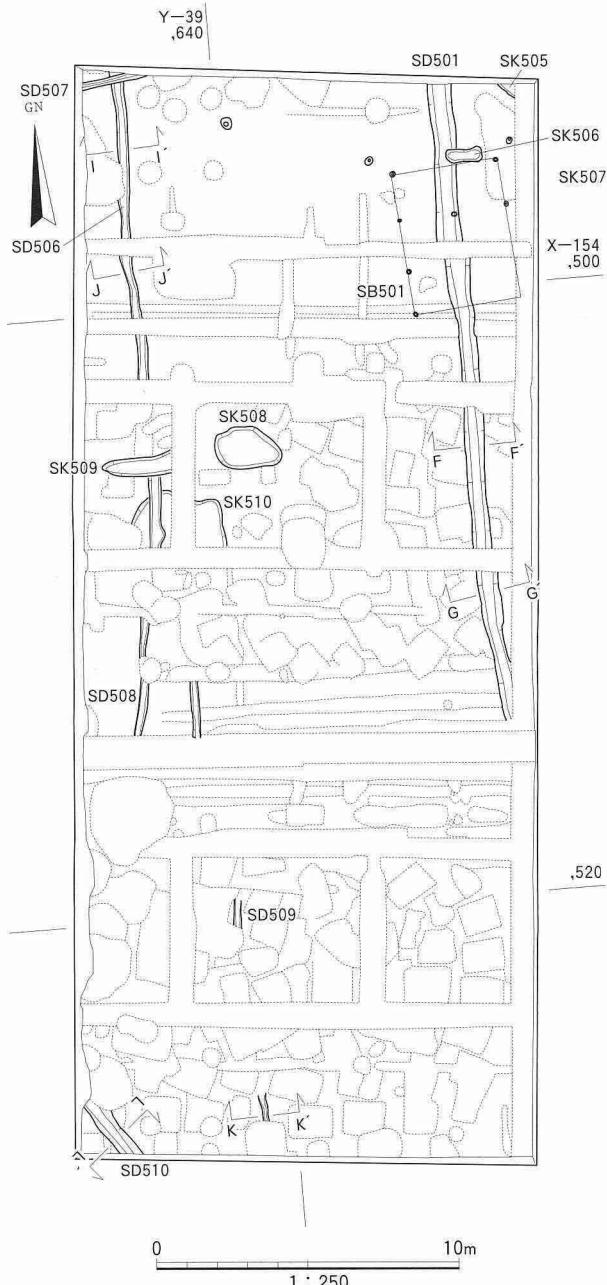


図26 南区鎌倉時代以前の遺構

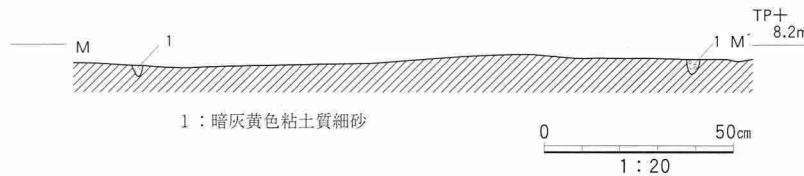


図27 SD511 · 512断面図

0.4mあり、幅に比して深い特徴をもつ。埋土は砂混り粘土で、検出した範囲では水流の痕跡は特に認められなかつた。

土師器・須恵器が出土したが、溝の時期を示すものではない。

これらの溝については切合い関係があることから同時併存していたものではないといえるが、おおむね飛鳥～奈良時代と考えられよう。

機能については推定にすぎないが、おそらくは導排水を目的としたものと思われる。SD501が南北方向を指向していることから、区画の意図もあった可能性もある。SD501がSX501 · 502の周溝を通過しつつ墳丘を避けていること、SD504が蛇行してSX502の周溝内を通過していることからこの時期までは少なくとも墳丘が残存していた可能性が高い。また、周溝についても出土遺物からある程度の窪みとして残っていたものと考えられる。SX502の北周溝部より確認したSD502 · 503は削平により

南部が失われた可能性もあるが、ある程度窪みとして残っていた周溝内部に溜まった水を導水する目的であったのかかもしれない。SX501 · 502の周溝をつなぐように検出されたSD505も両周溝内に溜まる水を1個所に集める目的があった可能性もある。

SD511 · 512 北区北半で検出した2条の平行する小溝である。幅は0.05mほどで深さはもっとも深い部分で0.07mである。方位は北で東に約50°振る。溝間の距離は1.5mで平行し、轍の可能性があるが、ベースとなる地層に明瞭な荷重による変形は確認できなかった。切合い関係のある遺構の中ではもっとも新しいが、出土遺物はなく正確な時期は不明である。喜連東遺跡

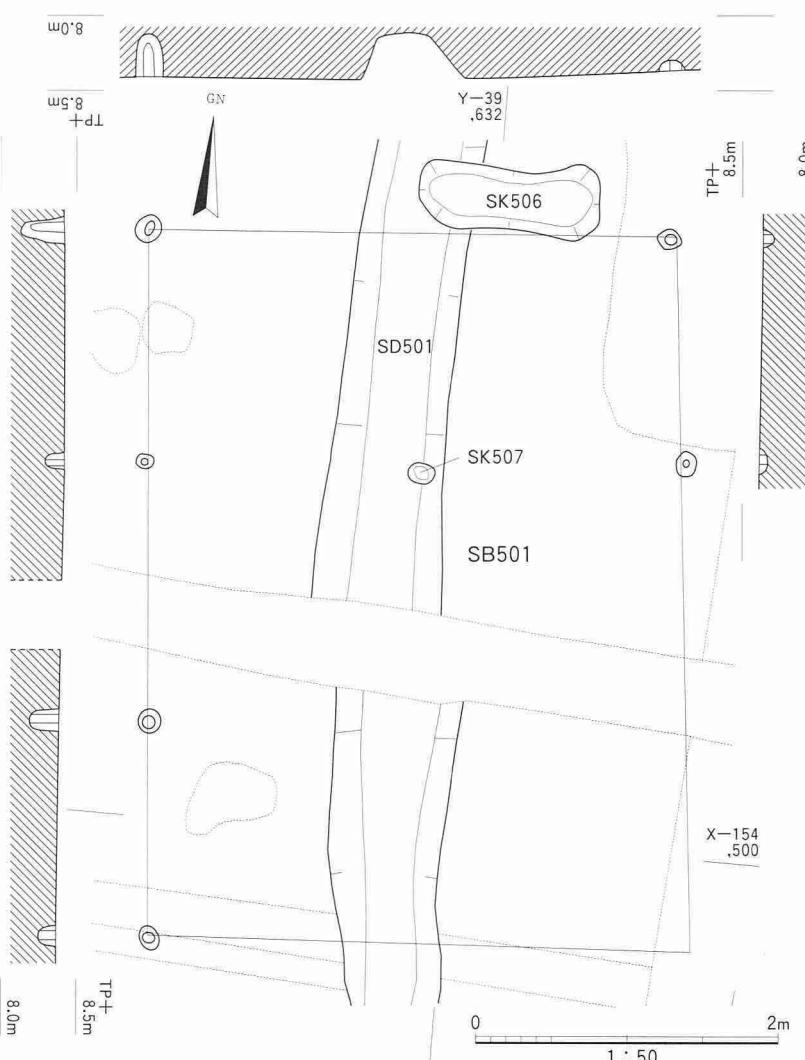


図28 SB501平 · 断面図

ではKR87-3次調査で室町時代に属するものが確認されている[大阪市文化財協会1999]。

iii) 堀立柱建物(図28)

南区で堀立柱建物1棟を検出した。

SB501 柱行3間(4.7m)、梁行1間(3.4m)の北で西に5°振る方位の堀立柱建物である。梁行については本来2間であったと思われるが、SD501と重なる位置に当たる中央の柱は検出できなかった。埋土のようすからSD501より後出すると推定できるため、本来の堀削自体が浅く、削平を受けたと考えられよう。建物内のはぼ柱筋の通る位置に後述のSK507があるが、埋土の状況から柱穴とは考えにくい。柱穴平面形は直径15cm程度の円形で、深さはもっとも残りのよいもので0.3mあるが、概して遺存状況は悪い。柱痕跡は直径7~10cmである。

時期を決する遺物は出土していないが、埋土が平安時代の土壌と類似すること、SK502が建物との係わりで掘られた遺構であるとすれば、平安時代に位置づけられる。

柱穴の可能性がある小穴は北・南区でほかにも数基検出したがごく少数であり、建物などの構成を復元することはできない。

iv) 土壌(図29~36、図版6)

北・南両区にて大小さまざまな土壌10基以上を確認した。

SK501・502 北区北端で検出した。いずれも平面不整形で深さ0.1m未満と浅いことが共通点としてある。埋土は褐色シルト質粗粒砂である。不整形で浅いことから人為的なものではなく自然の窪みである可能性が高い。

SK502からは土師器・須恵器・埴輪片が出土したが量は少ない。飛鳥時代に位置づけられよう。

SK503 北区北端で検出した不整形の土壌である。もっとも深い部分で深さ0.1mある。東側と西側とで埋土がいくぶん異なっており、2つの遺構が切合っている可能性もある。平面が不整形であること、深さが浅い点はSK501・502に共通するが、埋土下層に堀削時の再堆積土と考えられる堆積が認められることが大きく異なっている。

須恵器片が出土し、飛鳥時代と考えられる。

SK504 北区南側で検出した土壌である。平面径0.9mほどの不整円形を呈する。深さ0.05m

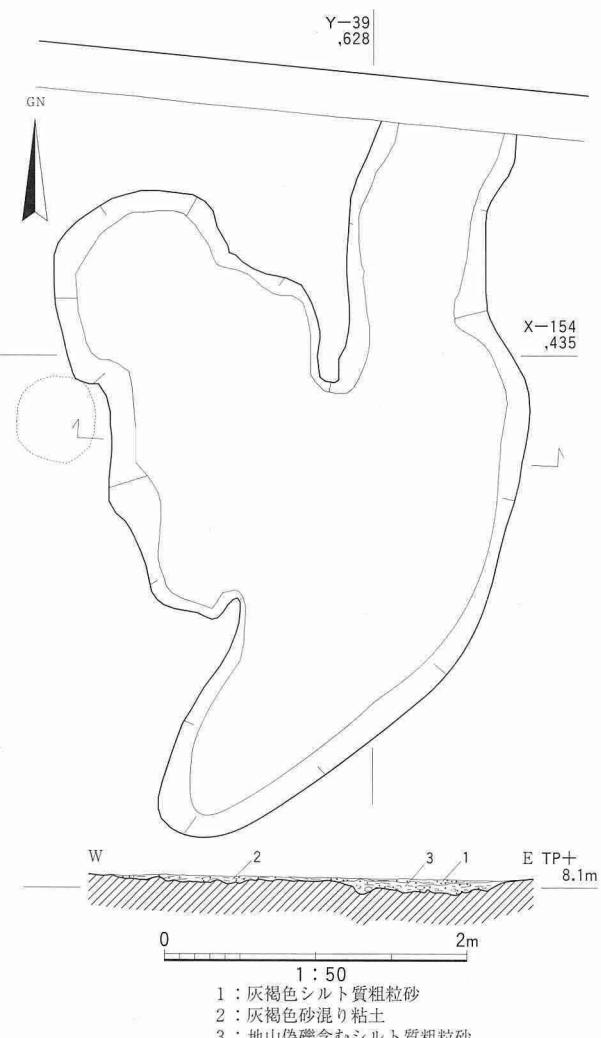


図29 SK503平・断面図

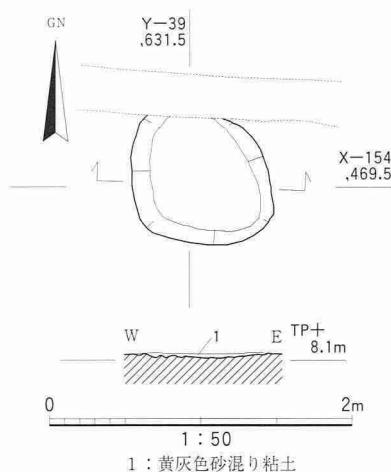


図30 SK504平・断面図

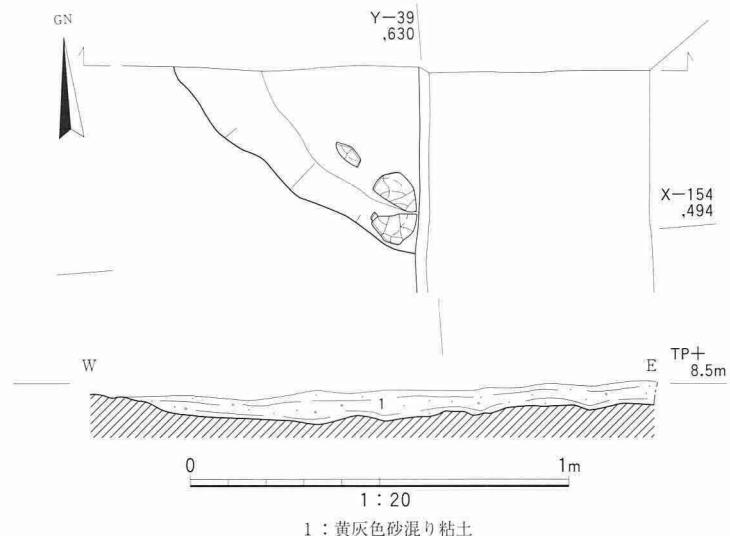


図31 SK505平・断面図

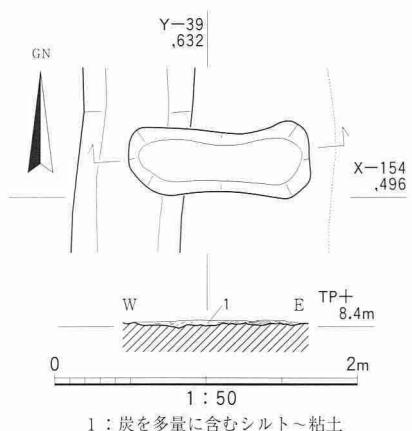


図32 SK506平・断面図

と浅く、底面には凹凸がある。

遺物は出土しなかった。

SK505 南区北東端で検出した土壙で大部分は調査範囲外である。調査区東壁にも埋土が一部認められることから形状は不明ながらも1.25m以上の規模がある。深さは0.1m程度である。土師器皿が出土した。

16・17は土師器皿で、17はほぼ完形である。口縁部にはナデが施され、端部は緩く外反する。平安時代Ⅲ期新、11世紀中葉に属すると考えられる。

SK506 南区北東部で検出した土壙である。SD501を切る。

長軸1.2m、短軸0.4m、深さ0.05mの浅い皿状を呈する。埋土は炭を多量に含むシルト～粘土である。埋土については洗浄を行ったが骨片などは採取されなかった。用途は不明であるが、後述のSK507と関連ある遺構の可能性がある。KR92-3次調査では平安時代後期～鎌倉時代と考えられる同様の形態の土壙が数基検出されている[大阪市文化財協会1992]。

SK507 SK506の約2m南で検出した土壙である。SD501を切る。直径0.16mの平面円形で深さは0.25mある。埋土は炭を多く含み、特に一辺0.10mほどで角柱状に多量の炭を含む部分が認められ、この上部からは黒色土器碗の底部20が逆位で出土した。位置的にはSB501の柱筋の通る個所にあたるが、埋土の状況からは柱穴とは考えがたい。埋土については洗浄したが骨片など火葬墓と考えられる確証は見いだせなかった。近隣で火

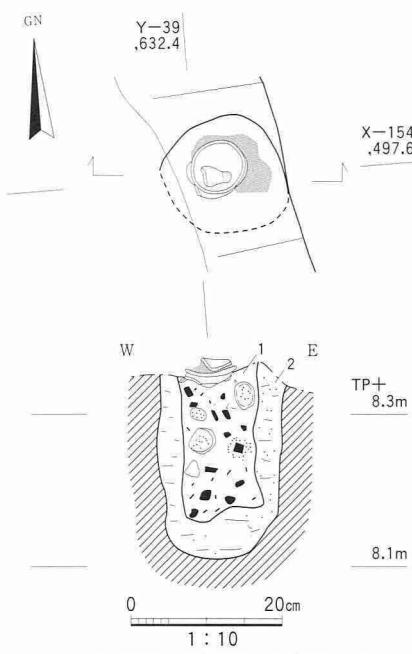


図33 SK507平・断面図

を燃やし、穴を穿ったのちに角筒状の有機質の容器に炭を入れて埋納した遺構と推定できる。位置からSB501に係わる地鎮などに関連する遺構の可能性もある。

20は内黒の黒色土器碗底部である。高台断面は台形で外方に張り出す。平安時代Ⅲ期の資料であろう。

SK508 南区中央やや北よりで検出した土壙である。長軸2.1m、短軸1.3m、深さはもっとも深い部分で0.2mある。西で検出したSK509と本来一連の土壙であった可能性がある。

土師器・須恵器細片が出土した。

SK509 SK508の西側で検出した土壙である。幅0.6m、深さ0.2mの溝状を呈する。SD506を切る。土師器片が出土した。

18・19は土師器皿である。18の口縁部は外反したのちに端部がわずかに上方につまみあげられ、19の口縁部はわずかに外反する。平安時代Ⅲ期新、11世紀中頃に属すると考えられる。

SK510 SK508・509の南で検出した土壙である。南側は攪乱によって失われているため本来の形状は不明であるが、広い部分で3.1mある。深さはもっとも深い部分で検出面より0.1mと幅に比して浅い。

細片がほとんどであるが、土師器皿が比較的多く出土した。

21～28は土師器皿である。このうち21～26は口縁部を外反させ端部を上方に肥厚させるものである。細片が多いため口径については誤差が含まれると考えられるがおおむね口径9～10cmである。底部にはユビオサエが残る。27は口縁部に施されたナデのため端部が外反ぎみとなる。28は口縁部が外反する。歪みが大きく径は不明である。遺構出土遺物には瓦器片が含まれないことから平安時代Ⅲ期新、11世紀中葉に属すると考えられる。

2) その他の遺物

i) 石器遺物(図37、図版11)

各層より弥生時代以前にさかのぼる石器遺物が出土している。いずれも遊離資料であるためまとめて記す。なお、石鎌の

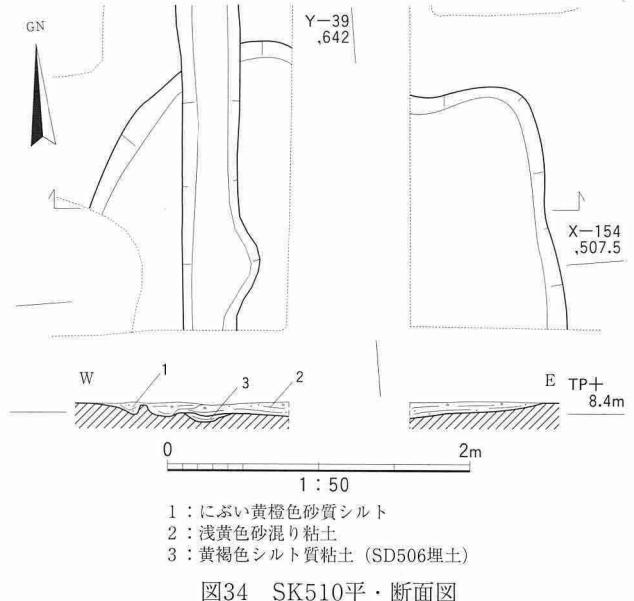


図34 SK510平・断面図

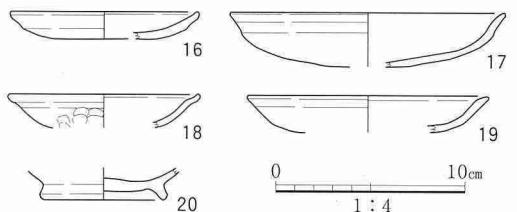


図35 SK505・507・509出土遺物

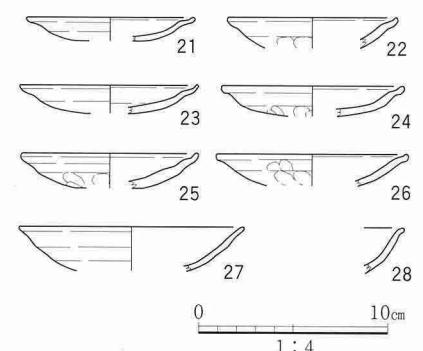


図36 SK510出土遺物

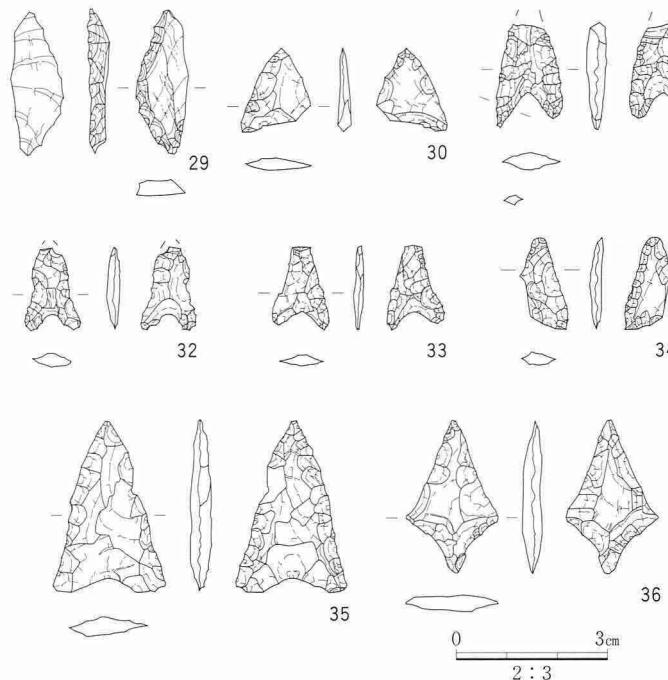


図37 石器遺物

第5層(32・33)、SX501(31・35)、SD501(30)、SD502(29・34・36)

分類および記述に当たっては[菅榮太郎 1995]に従った。

29はSD502より出土した。チャート製の二側縁加工のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とする。細部調整は裏面側から背面左側縁と右側縁基部に施されている。左側縁の調整加工はていねいである。

30～36は石鏃である。石材は31がチャートのほかはサヌカイトである。30はSD501から出土した。凹基無茎式でA-1類に当たる。加工は粗く未製品の可能性がある。縄文時代早～中期前葉の資料であろう。31はSX501の東周溝より出土した。凹基無茎式でB-1類に当たる。縄文時代早～後期の資料であろう。

32は第5層より出土した。凹基無茎式でD-2類に当たる。縄文時代中期後葉～後期の資料である。33は第5層より出土した。凹基無茎式でD-2類に当たる。薄い薄片を素材として利用している。先端は欠損している。縄文時代中期後葉～後期の資料である。34はSD502から出土した。平基無茎式でE-2類に当たる。作用部側縁の加工は比較的ていねいである。縄文時代晩期～弥生時代前期の資料であろう。35はSX501の西周溝から出土した。平基無茎式でE-1類に当たると考えられる。縄文時代晩期～弥生時代前期の資料であろう。36はSD504から出土した。有茎式でI類に当たる。断面形状は扁平である。弥生時代中期の資料であろう。

ii) 墳輪(図38、図版11)

第5層をはじめとして各層および遺構から埴輪片が出土した。位置的にはSX501・502周辺から出土したものも多くあり、本来、両古墳に伴っていたものも含まれる可能性がある。なかでも調査開始時に設定したサブトレンチ内、第5層より出土した37・39・41は正確な位置は記録していないが、位置的にSX501の周溝付近であり、特徴も類似することからSX501に伴っていた可能性が高いと思われる。

37～39は朝顔形円筒埴輪である。37・39は第5層、38は第4層から出土した。タガの形状は38が断面三角形に近い低い台形、39が台形である。40～47は円筒部である。41は第5層、40・43・47は第4層、45は第3層の小溝、44は江戸時代の井戸SE304、46は江戸時代の井戸SE308、42は攢乱よりそれぞれ出土した。タガの形状は断面方形で高いもの41・42、断面方形で低いもの40・43～46がある。概して風化により磨滅したものが多いが、調整の確認できるものはすべて外面タテハケあるいはナナメハケで内面にはハケののちナデを施している。いずれも土師質焼成で無黒斑である。43のみ色調が異なり、堅く焼け締まっている。47は基部で底径11.4cmある。

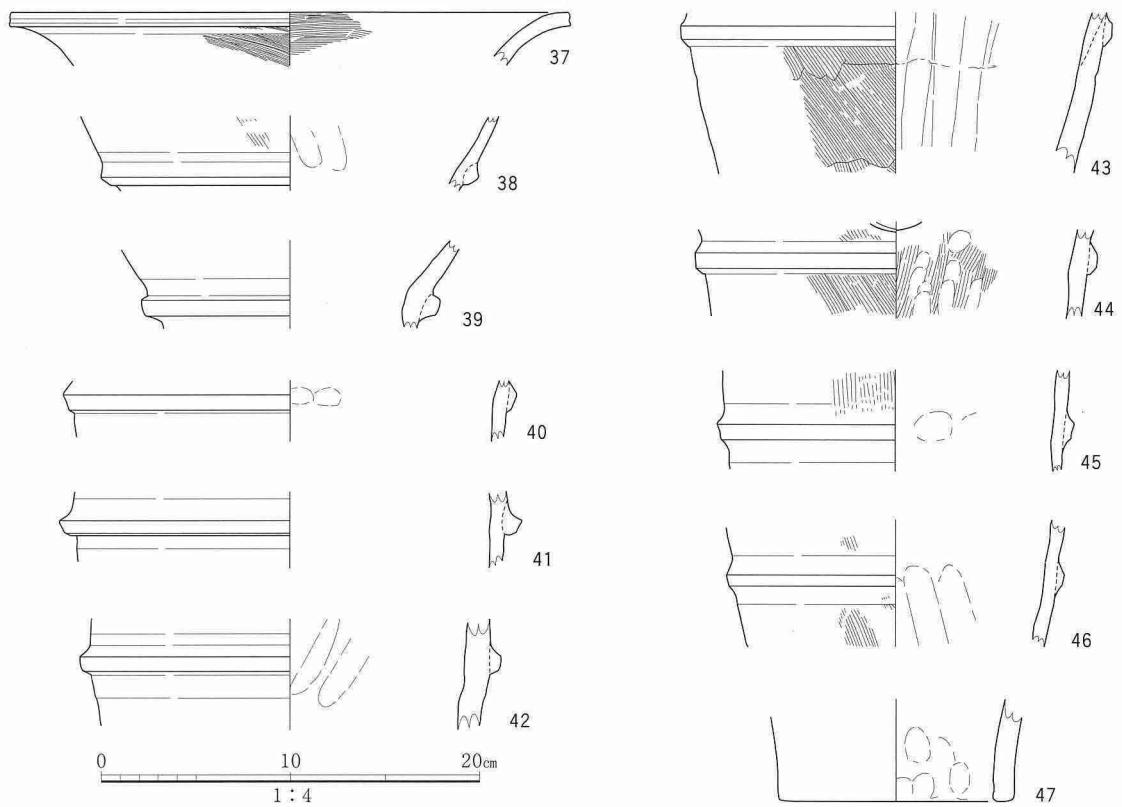


図38 各層出土遺物(埴輪)

第3層(45)、第4層(38・40・43・47)、第5層(37・39・41)、SE304(44)、SE308(46)、攪乱(42)

iii) 第5層出土遺物(図39)

北区において遺構面を覆う第5層からの出土遺物を記す。遺物の多くは細片であり、図化できるものは少ない。

48は土師器碗である。口縁部にはナデが施され、体部にはユビオサエの痕を残す。平安時代Ⅲ期の資料であろう。

49・50は須恵器で49は杯もしくは有蓋高杯、50は壺である。49は体部下半にカキメが施されている。杯部は扁平で受部の稜は鋭い。SD501出土の15に似るが別個体である。50は頸部に2条の突帯を巡らせ、その間に波状文を施している。ともにTK208型式に属する。

51は瓦器皿である。口縁部はナデ調整で体部はユビオサエである。内面の暗文は観察できない。小片のため詳細な時期は不明であるが、平安時代Ⅳ期、12世紀頃と考えられる。

52は白磁碗である。高台の形状は外面がほぼ直立するのに対し、内面は傾斜する。胎土は極めて緻密で、体部外面にはヘラケズリを施している。外面には釉は掛けられていない。内面について
は器面の荒れのため明らかでない。II-1類
[横田賢次郎・森田勉1978]に属し、11世紀中葉～12世紀初頭に位置づけられる。

このように図化したものはおおむね平安時代、12世紀までに収まる。ただし、図化でき

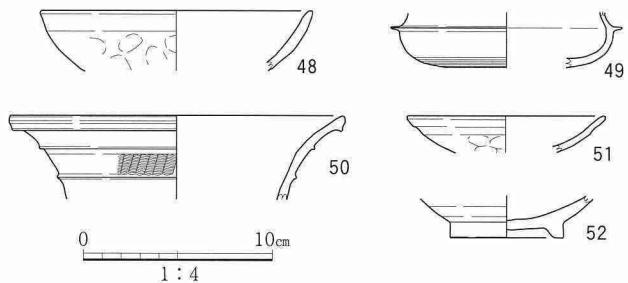


図39 第5層出土遺物

なかつた遺物の中にわずかながら鎌倉時代に降る瓦器片も含まれていることから、第5層の年代を鎌倉時代までとみなしておきたい。

3) 小結

今回の調査地では地山面が高いこともあり、古墳～鎌倉時代の遺構がほぼ同一層準での検出となつた。遺構群の時期は出土遺物や埋土の状況から判断したため、不明なものも多い。また、削平を受けた遺構も多く存在すると思われるが、方墳には築造時のベースが遺存していることもあり、検出された遺構・遺物がおおよそ当時の状況を示していると考えられる。調査地についてはほぼ以下のようない変遷が推定できよう。

出土したもっとも古い遺物は旧石器時代にさかのほる。しかしながら弥生時代以前の遺物については石鏃が主体であり、弥生時代以前については集落域ではなかったと考えられる。

古墳時代中期には方墳が築かれる。周辺の調査でも同時期の方墳が検出されており、墓域として利用されたのであろう。

飛鳥～奈良時代には数条の溝が掘られている。奈良時代の集落については西接の調査地で検出されている。また、耕作地については今回検出できなかつたが、溝の延びる北側に広がる低地では同時期の水田と想定される遺構も確認されており、溝群は耕作域への導水に係わる溝と推定できよう。

平安時代には掘立柱建物および土壙が検出された。しかし、遺構・遺物ともに希薄である。集落の中心であったとは考えがたく、周縁部にあたつていたのであろう。

鎌倉時代の遺構は明らかでない。出土遺物も少なく、様相は不明である。

第4節 室町時代の遺構と遺物

第4層の遺構が相当する。本層は厚い部分で層厚10cm程度遺存するが、第3層の耕作などにより失われている部分も多い。また、拡張部については重機によりおもに除去したため遺構検出作業は行えていない。

1) 遺構(図版7)

第4層下面において遺構検出作業を試みた。微細な凹凸は認められたものの遺構は検出されなかつた。ただし、本層は作土化されていることから耕作域として利用された期間があったと推定される。本層の下面のレベルは北区においてTP+8.2m前後、南区ではTP+8.5m前後である。それぞれの区内での標高差はあまりないことから、北区と南区とで異なる土地区画であった可能性がある。

また、調査地西側に位置するKR91-3・92-3次調査で検出された堀状の区画および井戸などは検出されなかつた。本調査地まではこれらの施設は広がっていないと考えられ、区画施設が存在するとすれば、西接する未調査部分である道路下と考えられよう。

2) 遺物(図40)

第4層からの出土遺物を記す。作土化されていることもあり細片が多く図化できるものは多くない。また、耕作に伴い、本来下位層準に含まれるべき遺物が多く本層からも出土しており、本層の時期を直接示す遺物は少ない。

53・54は土師器皿である。ともに口縁部には強いナデを施している。小片のため時期は決しがたい

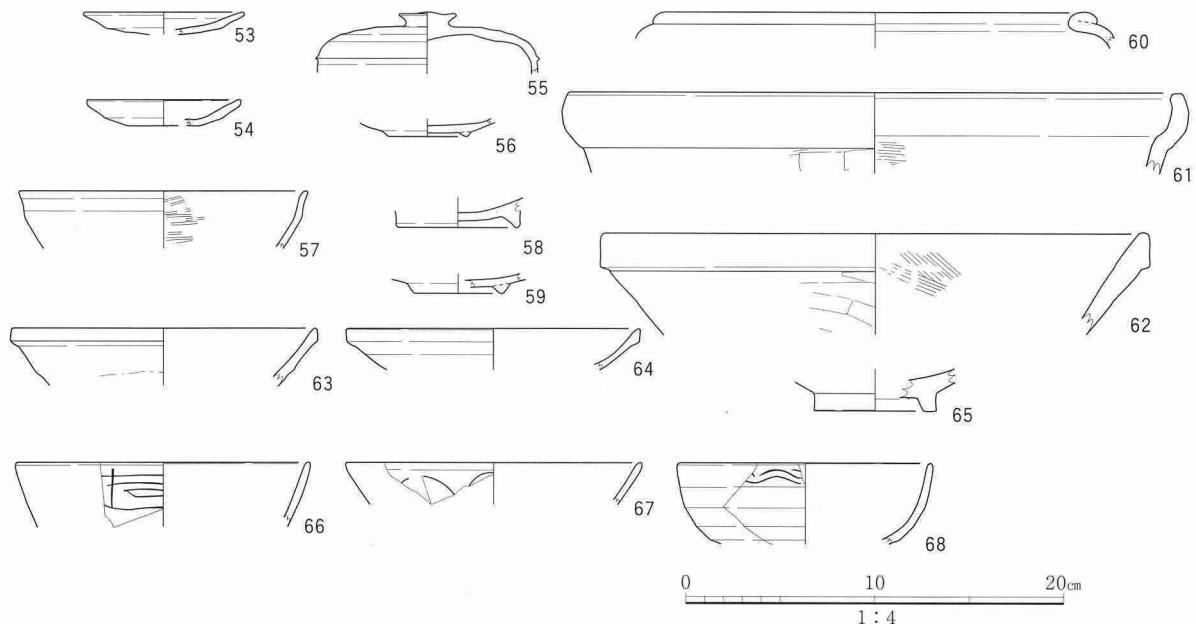


図40 第4層出土遺物

が、平安時代Ⅳ期に属するものであろう。

55は須恵器高杯蓋である。つまみは扁平で口縁部と蓋部の境には明瞭な稜を有する。天井部は4分の1ほどが遺存するが、歪みが大きい。TK208型式に位置づけられる。

56は内黒の黒色土器碗である。高台は径が狭く、断面三角形で低い。平安時代Ⅲ期と考えられる。

57～59は瓦器碗である。57は小片で、遺存する部位より復元した傾きは実際と異なる可能性がある。57の外面にはヘラミガキが認められない。58の高台は三角形に近いくずれた台形で外方に踏ん張る形状をとる。59の高台は低く断面三角形である。58・59ともに風化のためヘラミガキは確認できない。いずれも細片のため時期は決しがたいが、57はC-Ⅲ-3期、58はC-Ⅱ-3期、59はC-Ⅲ-2期を前後する時期と考えられ、それぞれ、13世紀前半、12世紀後半、12世紀末葉～13世紀初頭に位置づけられよう。

60は土師質の鉢である。体部は胴の張る袋状であると考えられ、羽釜の可能性がある。口縁端部は外方に折り曲げられ玉縁となる。14～15世紀のものであろうか。

61は土師質の鉢もしくは鍋である。袋状になる口縁端部は平坦な面をもつ。体部内面にはハケメ、外面には板状工具によるナデが施されている。15世紀代のものであろう。

62は瓦質の鉢である。口縁端部は垂直で幅広の面をもつ。体部外面には板状工具によるナデ、内面にはハケメが施されている。14世紀末葉～15世紀初頭に位置づけられよう。

63～65は白磁である。63・64は口縁部を玉縁にするもので、63は胎土は粗く黒色の細粒を含む。黄白色の釉は外面に特に厚く、体部下半には施釉されていない。12世紀代に位置づけられる。64はいくぶん内湾する器形で、胎土が緻密で釉は薄く、青白色の発色をしている。10世紀中葉に位置づけられる。65は碗底部で断面台形の高台をもつ。胎土は緻密で黄白色の釉が高台まで掛けられている。14世紀に位置づけられよう。

66～68は青磁である。66は雷文帯が、67には鎬蓮弁文、68には口縁部付近に波文が施される。釉調は66・67が緑色で68は淡い。68は深い碗形の形状である。66は15世紀代、67は14世紀代前半、68は16世紀まで降るものであろう。

3) 小結

調査地西側に展開していた施設群は今回調査地までは広がっていないことが明らかとなった。出土した遺物はいずれも細片で量は多くないが、青磁・白磁を多く含むなど西側で出土した遺物群の様相にはほぼ等しい。西には堀に囲まれた瓦葺きの建物群などがあり、さらに西に広がる墳墓堂群との関連から寺院跡と推定されている。調査地は耕作地として利用されていた可能性が高く、これらの施設の周囲においては耕作が行われていたことを示すものであろう。

第5節 江戸時代以降の遺構と遺物

第3層下面より上位で確認された遺構群が相当する。このうち第3層下面および第3層内検出遺構がおおむね江戸時代に相当する。北区、南区とともに井戸のほか多くの小溝群などが検出された。調査地では前時代に引き続き耕作地として利用されていたと推定できる。

遺構は切合い関係の認められた北区の成果から2時期に大別することができる。西側に段が造られ、小溝群が掘られた時期、段が埋まり全面に小溝群が掘られる時期である。井戸は切合い関係のわかるものでは段および小溝群の掘削に先行して埋められているが、併行して存在していたものもあると考えられる。

1) 遺構と遺物

i) 段(図41~43)

SX301 北区西端で検出した落込みである。深さ0.2m程度で底部はおおむね平坦である。埋土は第4層の作土である。内部および肩部に沿っては幅0.2m、深さ0.05mの小溝が掘られている。肩部に掘られたものは幅0.3m、深さ0.1mとほかの小溝に比べていくぶん深い。溝の方位はおおむね南北方向であるが、途中から西に屈曲するものもある。小溝群の方位の違いからSX301は南区までは連続していなかったと考えられよう。

SX301が掘削された目的は耕作地とするにあたり、必要とされる平坦面の確保にあったと推定できる。それまでに存在した地形の起伏を解消するため段状の耕作域を造成したのであろう。ただ、段差はあまり大きくなかったため、耕作につれて段差が解消されていったと考えられる。

出土遺物には土師器・須恵器・黒色土器・瓦器

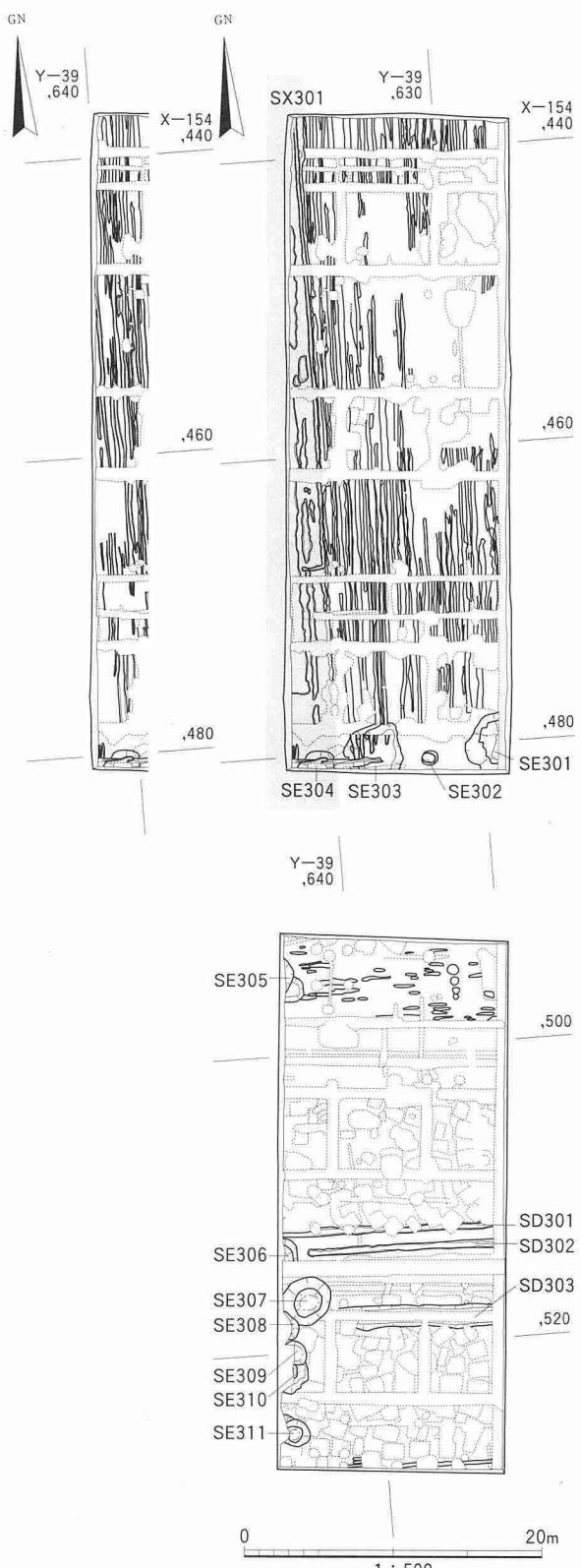


図41 江戸時代の遺構(図左上はSX301埋没後)

のほか白磁・青磁などがある。

69・70は土師器である。69は皿で口縁部はナデにより緩く外反し、端部は丸くおさめる。体部下半にはユビオサエを残す。16世紀代であろう。70は椀で、口縁部はナデ、体部はユビオサエである。

平安時代Ⅲ期、11世紀代に属するものであろう。

71は瓦器椀である。ヘラミガキは観察できない。小片のため時期を決することはできないが13世紀代のものであろう。

72は東播系の片口鉢である。口縁部はわずかに外反し、端部は上下に拡張する。口縁部には重ね焼の痕が見られる。12世紀末葉～13世紀初頭に位置づけられる。

73は瓦質の甕である。口縁部は肥厚し、外方に折曲げられる。外面にはタタキ、内面にはハケが施されている。15世紀代であろう。

74は白磁碗である。体部は直線的に外方に開き、口縁は外反させ、端部には面をもつ。胎土は緻密で灰色を呈している。13世紀代であろう。

75・76は青磁である。75は碗で外面には肉厚に蓮弁を削出している。胎土は緻密で釉は厚い。13世紀代であろう。76は皿である。体部中位で屈曲

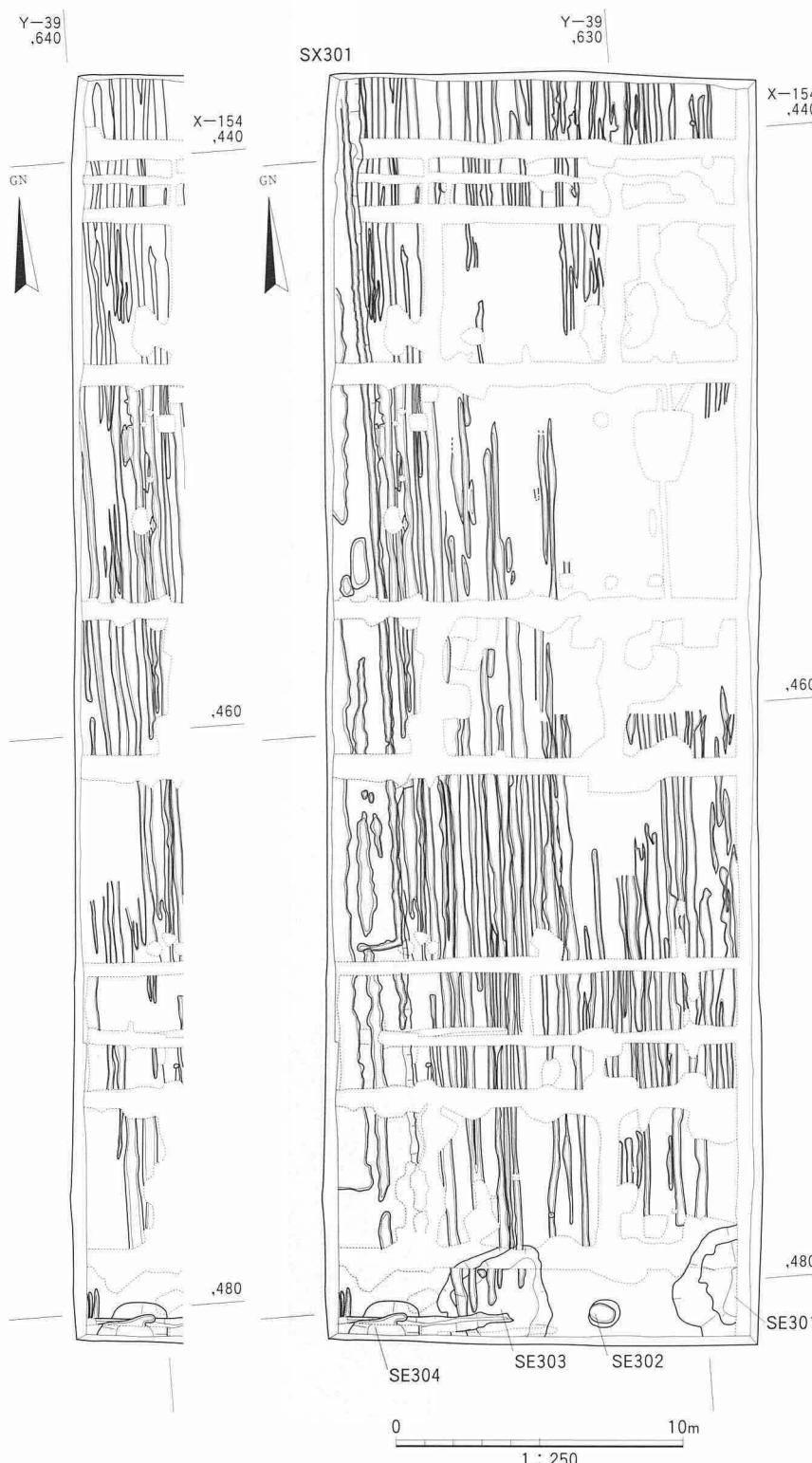


図42 北区江戸時代の遺構(図左はSX301埋没後)

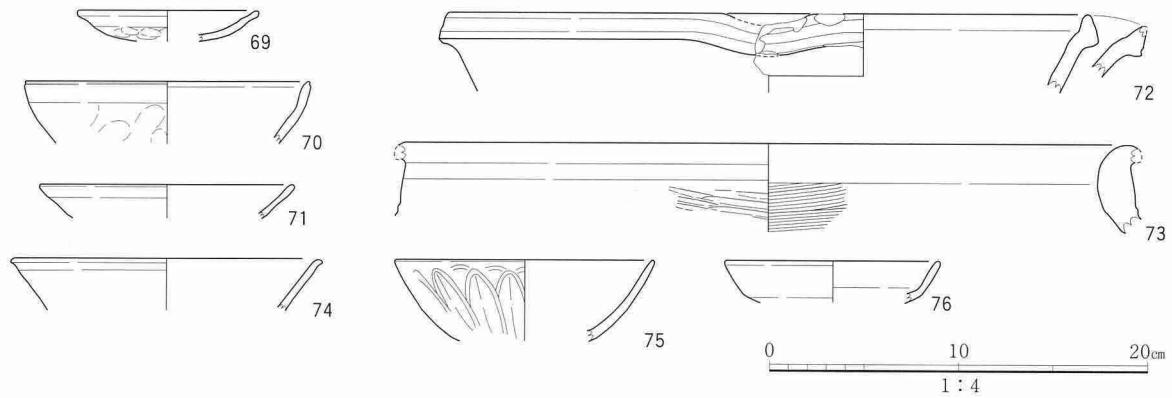


図43 SX301出土遺物

し、屈曲部内面は沈線状に削られている。13世紀代のものであろう。

図化した遺物はいずれも室町時代以前であり、時期を直接示すものではない。

ii) 井戸(図45~51、図版8・9・11)

北区で4基、南区で7基確認された。分布は北区では南端に、南区では西端に集中する。

SE301 北区南東隅で検出した。東半が調査区外のため正確な規模は不明であるが、検出面での形状は直径4m前後の平面円形である。深さ1.3mまでは人力で掘削したが、深くなるほど径は小さくなっていた。以深についてはおもに重機による掘削を行った。安全のため精査することはできなかったが、検出面から深さ約5.6mにて埋土が確認されなくなったことから、底に達したと推定できる。この深度の地山は礫層であり、激しく湧水していた。埋土は検出面から2.2mまでは人為的な埋戻し土で、以下は自然堆積である。検出面から3.2m、底から0.8mの個所では厚さ約0.3mで有機質を多量に含む地層が堆積していた。本層からは多量の木の葉などの植物遺体やカメの甲羅・シカの角および骨などの動物遺体が出土した。木製品としては箸が一点出土している。本層は井戸が機能していた際の底にあたる部分と考えられる。以深の埋土は明確に確認することができなかったが、地山層

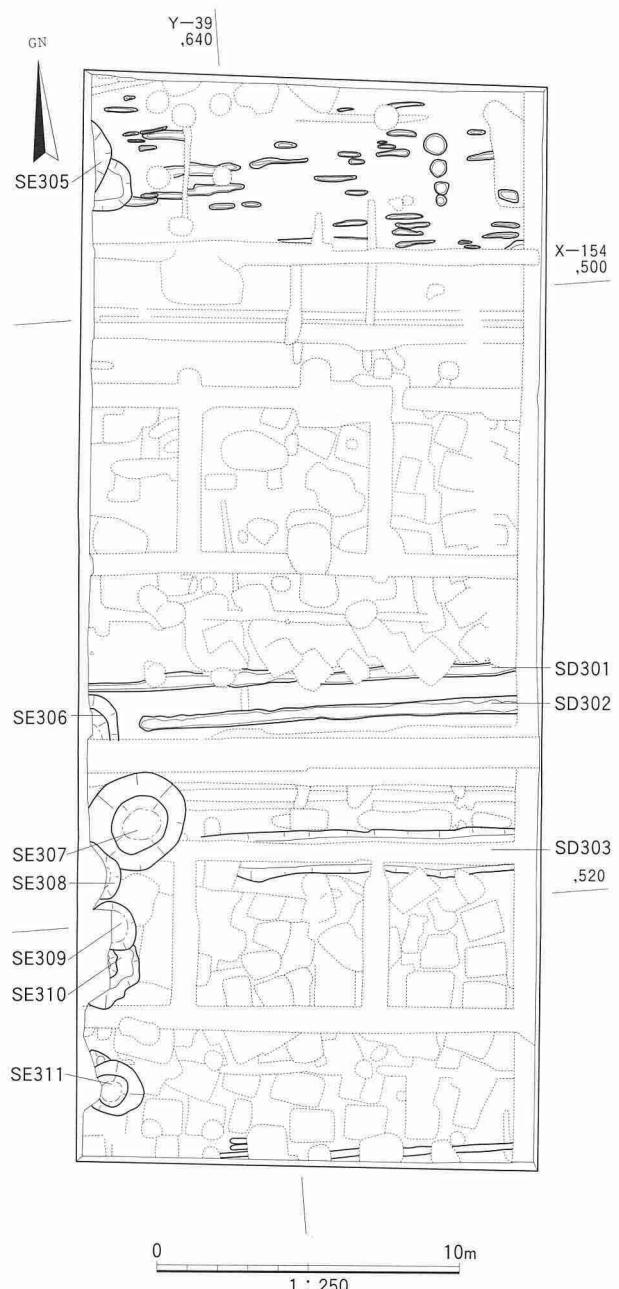
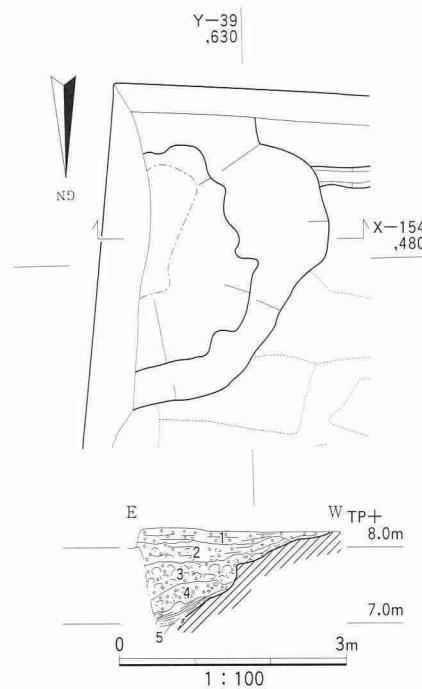
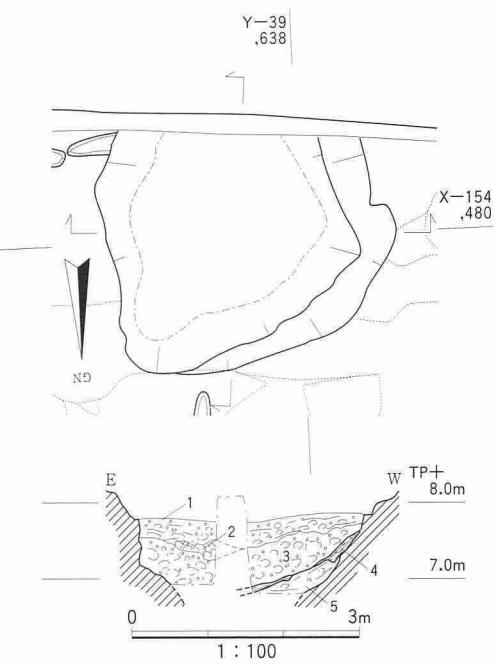


図44 南区江戸時代の遺構



1:灰オリーブ色粘土質粗粒砂
2:地山・粘土偽礫含む灰オリーブ色粘土質粗粒砂
3:粘土偽礫多く含む灰オリーブ色粗粒砂
4:粘土偽礫多く含む緑灰色粗粒砂
5:緑灰色粘土質粗粒砂～粘土

図45 SE301平・断面図



1:地山偽礫含む黄褐色粘土質粗粒砂
2:粘土偽礫含む灰オリーブ色粗粒砂
3:粘土偽礫多く含む暗灰色粗粒砂
4:灰色粘土
5:粘土偽礫含む緑灰色粘土質粗粒砂

図46 SE303平・断面図

と類似していることから井戸掘削時の再堆積層の可能性が高い。井戸枠・水溜めなどの施設は確認されなかった。埋土中に有機質が多量に遺存することから、本来あったとすれば遺存していると思われ、少なくとも底部付近にはなかったと考えられる。一方上部については検出時の形状が大きく広がっており、何らかの施設があったものを除去したと考えられよう。

出土遺物のうち土器類は多くなく、またすべて上部の人为的な埋土からの出土である。須恵器・瓦器・瓦質土器・焼締陶器のほか瓦類が出土したが、いずれも細片で時期を決することはできない。

83は瓦質土器甕である。埋土上部より出土した。口縁部は肥厚し、

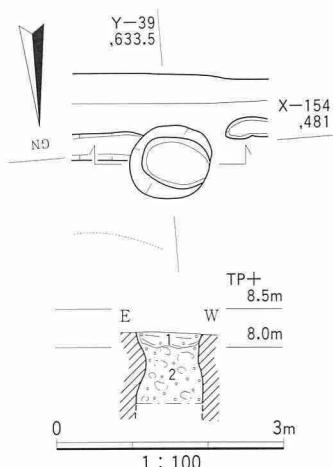
わずかに外方に開く。体部外面にはタタキが施されている。16世紀前半に属するものであろう。85は木製の箸である。長さ23.2cmで中央部がもっとも太く、両端にいくほど細くなる。断面形が六角形である。

SE302 北区南端で検出した。直径1.0mの平面円形である。検出面より1.2mまで掘削を行ったが、井戸側などの施設は確認できず、埋土はすべて人为的な埋戻し土であった。

遺物は土師器・瓦器片がごく少量出土したのみである。

79は瓦器碗である。内面には密にヘラミガキが施されている。平安時代IV期古に相当し、11世紀後葉に位置づけられよう。

SE303 北区南端で検出した。検出面での形状は直径4m前後の不整円形である。検出面より1.3mまで掘削したが井戸側などの施設は確



1:灰オリーブ色粘土質粗粒砂
2:粘土偽礫多く含む暗灰色粗粒砂

図47 SE302平・断面図

認できなかった。深くなるにつれ径を減じており、井戸廃絶にあたり、周囲を広く掘削して井戸側などの施設を除去したものと推定できる。埋土は人為的な埋戻し土であるが、途中、薄い水成層が認められることから一旦埋戻したのち土圧によって窪みが生じ、再度埋戻したと考えられる。

土師器・瓦器・瓦質土器・丸瓦・平瓦が出土したが細片が多く、直接井戸の時期を示すものではない。

77は土師器皿である。口縁部は外方に屈曲したのち端部がつまみあげられる。平安時代Ⅲ期新、11世紀中葉に位置づけられる。84は水波文軒平瓦である。顎裏面は傾斜をなし、平瓦部の境は明瞭である。顎と平瓦部との接合にはキザミメを施している。胎土には砂粒を多く含み、燻されている。室町時代前半、14～15世紀代に位置づけられる。

SE304 北区南西端で検出した。南半が調査区外であるが、検出面での形状は直径約2.5mの平面円形である。検出面より1.2mまで掘削したが井戸側などの施設は確認できなかった。深くなるにつれ径を減じており、SE303と同様、井戸側などの施設が除去されたと考えられる。切合い関係からはSX301より古い。

出土遺物には土師器・須恵器・黒色土器・瓦質土器・平瓦・丸瓦・焼締陶器・白磁・青磁・埴輪があるがいずれも細片である。

78は土師器皿である。口縁部は緩く外方に折曲げられ、端部は内面に施された沈線状の凹みによりわずかに上方に突出する。平安時代Ⅳ期、12世紀代に位置づけられる。

SE305 南区北西部で検出した。一部を検出したのみであるが形状から井戸と考えられる。検出面から約1.0m掘下げたが、構造物は確認できず、埋土はすべて人為的な埋戻し土であった。

遺物は土師器・須恵器細片が出土したのみである。

SE306 南区南西部で検出した。一部のみの検出で、0.5mしか掘削できなかったため詳細は不明であるが形状から井戸と考えられる。埋土はすべて人為的な埋戻し土である。

遺物は出土しなかった。

SE307 南区南西部で検出した。検出時の形状は直径3.4mの平面円形である。検出面から1.3mまで掘削したが構造物は確認できなかっ

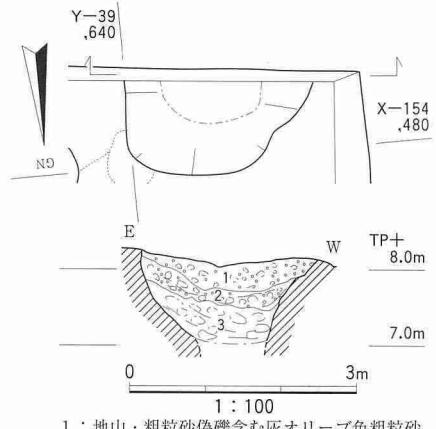


図48 SE304平・断面図

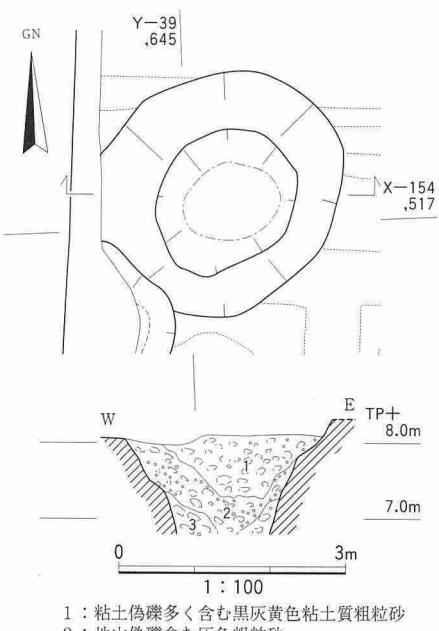


図49 SE307平・断面図

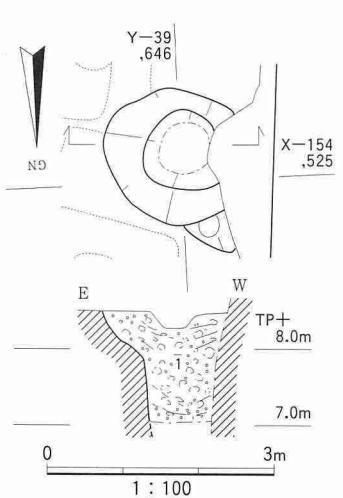


図50 SE311平・断面図

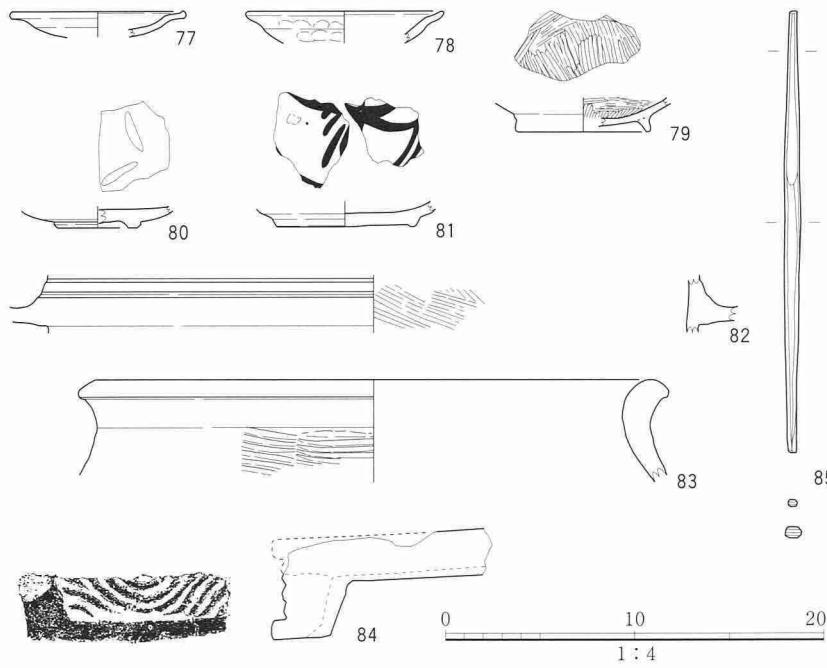


図51 井戸出土遺物

SE301(83・85)、SE302(79)、SE303(77・84)、SE304(78)、SE308(80~82)

埴輪・瓦質土器・唐津焼・瀬戸美濃焼志野・白磁・平瓦・丸瓦が出土した。

80は唐津焼皿である。高台畳付には糸切り痕を残し、内底面の目痕は砂目である。81は志野皿で、内底面には草文が配され、円錐ピンの痕跡がある。82は瓦質土器羽釜である。80・81は17世紀前半に位置づけられることから、SE308の廃絶は17世紀前半と考えられる。

SE309 南区南西部で検出した。検出時の形状は直径1.6mの平面円形である。検出面より0.8m掘削したがすべて人為的な埋戻し土であった。

遺物は須恵器甕片が出土したのみである。

SE310 南区南西部で検出した。切合い関係からSE309より古い。検出時の形状は直径2.5mの平面円形である。検出面より0.6mまでは擂鉢状に落込み、以深は径約1mとなる。検出面より1.3m掘削したが構造物は確認できなかった。埋土はすべて人為的な埋戻し土であった。

遺物は出土しなかった。

SE311 南区南西端で検出した。検出時の形状は直径1.8mの平面円形である。検出面より1.5mまで掘削したが、構造物は確認できず、埋土は人為的な埋戻し土であった。検出面から0.6m下がったところからは径1.0mで急激に落込む。詳細な観察はできなかったものの検出面から3mまで重機による掘削を試みたが、底および構造物は確認できなかった。

遺物は埋土の上部から土師器・須恵器・焼締陶器擂鉢が出土したがいずれも細片である。

これらの井戸はSE301を除いて底まで調査することができ

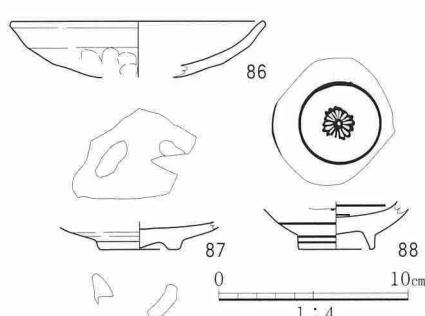


図52 SD303・小溝群出土遺物

SD303(88)、小溝群(86・87)

た。形状は深くなるほど径を減じている。埋土はすべて人為的な埋戻し土である。

遺物は出土しなかった。

SE308 南区南西部で検出した。切合い関係ではSE307に後出する。西半が調査区外であるため正確な形状は不明であるが、平面円形と考えられる。検出面から1.0mまで掘削したが、すべて人為的な埋戻し土であった。

土師器・須恵器・瓦器・

ず、出土遺物も井戸廃絶後、埋戻し土の上部から出土したものばかりである。切合い関係から小溝群に先行する井戸もあり、何基かは掘削が室町時代にさかのぼる可能性も否定できない。

iii) 溝(図52、図版8)

両区とも多数の溝が検出された。

SD301 南区で検出した東西方向の溝である。方位はほぼ正東西である。幅0.5mで深さは0.1m未満と浅い。埋土は地山偽礫を含む灰色シルトで溝掘削時の再堆積土と考えられることから、溝本来の深さはもう少し深かったと推定できる。

遺物は土師器・須恵器・瓦器細片が出土したのみである。

SD302 南区で検出した。調査区西端では削平のために失われている。SD301に平行し、間隔は溝の中心で1.3mである。幅0.5m、深さ0.1m程度で埋土もSD301と同様である。方位・規模からSD301・302は同じ目的で掘削された溝といえよう。

遺物は土師器・須恵器細片が出土したのみである。

SD303 南区で検出した。方位は正方位から約4°東で南に振る。幅1.5mで、深さは中央部を攪乱により失われているため不明であるがもっとも深い部分で0.15mである。埋土には水成層が確認され、溝肩部には部分的に杭を打込んだ痕跡が認められたことから、溝は滯水した状態で両側に護岸の施設があったと考えられる。SE307・308との先後関係は切合い関係が確認できた個所は多くの攪乱のためごくわずかであるが、SD303が後出する。

出土遺物は他の遺構に比べ比較的多く、土師器・須恵器・瓦質土器・青磁・白磁・焼締陶器・施釉陶器・肥前系磁器・平瓦・丸瓦などがある。

88は肥前系磁器碗である。器壁は厚く、内底面には花文を配する。高台畳付には重ね焼の痕跡を残す。18世紀後半の資料であろう。

小溝群 北・南区とも多数の小溝群を検出した。北区ではSX301埋没後にも掘削されている。南区では南・北端をのぞき検出できなかったが、ほとんどの地点で第4層自体が遺存しておらず、遺構面が高いため削平により失われたといえる。幅はいずれも0.2m前後で深さは0.05m程度である。耕作に係わるものであろう。埋土には水成層が認められるばあいが多く、おもに畠の畝間として機能していた可能性が高い。

遺物は細片が多く図化したものは少ない。

86は土師器皿である。器壁は厚く口縁端部は丸く收める。15世紀代のものであろう。87は青磁皿である。高台断面は低く断面台形で、体部外面にはヘラケズリが施されている。高台畠付と内底面には珪砂質の目痕が残る。胎土は粗く釉は全面に施され、発色は緑灰色である。

小溝群の方位が北区で南北方向、南で東西方向であり、両区は異なる耕作地であったといえよう。

第3層内および下面検出遺構からは今回調査地が江戸時代を通じて耕作地であったといえよう。遺構群のまとまりおよび方位から土地の占有についてはいくつかの区画に細分できる。

まず、小溝群の方位および北区の井戸の位置から北区と南区の間に大きな区分があるといえる。次に南区では調査区西端に井戸が集中することから、南区と調査区外西側とで異なる耕作地であった可

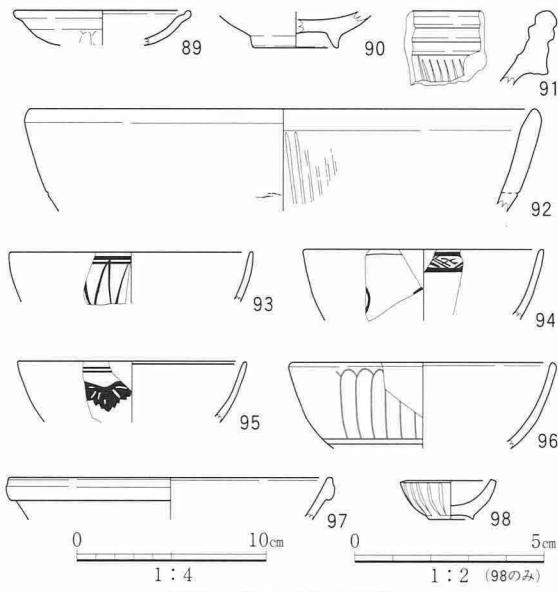


図53 第3層出土遺物

能性が高い。南区はさらにSD301・302を境として南北2つに細分されていた可能性もある。削平されているため遺構面本来の標高は不明であるが、南区の中ではSD301・302のあたりがもっとも高く、北と南にそれぞれ下がっていることから、区画の位置としては適しているといえる。SD303は埋土および出土遺物からこれらの中ではもっとも後出すると考えられ、SD301・302の機能を引き継いだものといえよう。

2) その他の遺物(図53)

第3層からの出土遺物を記す。

89は土師器皿である。口縁部は屈曲し、端部は上方に肥厚する。平安時代Ⅲ期新～Ⅳ期古、11世紀後半に位置づけられよう。

90は褐釉を施した陶器碗である。釉は全面に施したのちに内底面を蛇の目状に拭っている。

91は堺擂鉢で、重ね焼の痕跡が残る。

92は土師器鉢で、内面に櫛状工具による擂目が施されている。深い体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内傾する面をもつ。16世紀代のものであろう。

93～95は肥前系磁器染付碗である。いずれも18世紀代に位置づけられる。

96は青磁碗である。二次的に火を受けており、釉は失われている。体部は内湾し、口縁端部は丸くおさめる。外面には蓮弁文と圈線が線彫りされる。16世紀前半のものであろう。

97は白磁碗である。口縁部は玉縁状で胎土は粗い。12世紀代のものであろう。

98は軟質施釉のミニチュア皿である。褐色の釉が掛かる。

出土遺物の多くは下層に由来するものであるが、肥前系磁器などの存在から地層の年代は江戸時代と考えられよう。

3) 小結

江戸時代には調査地は耕作地として利用されていたことがわかった。また、調査地とその西側、北区と南区の北部と南部というようにいくつかの区画に分けられていたことが推定できた。とくに調査地とその西側を分ける区画が室町時代よりほぼ継続していることが注目されよう。また、今回報告からは割愛したが、現代作土である第2層下面でも耕作痕跡が確認されている。正方位に近い方向を示すものの、北区で南北方向、南区で東西方向と、江戸時代の方位と一致する。さらにSD303と同じ位置に溝が掘られており、この区画は現代まで踏襲されていたと考えられる。

江戸時代は喜連東遺跡一帯で耕作痕跡が確認されており、生産域としての土地利用がなされていたのであろう。

第IV章 調査成果のまとめ

1) 旧石器～縄文時代

喜連東遺跡は発掘調査の結果から長吉台地の先端に位置することが判明している。段丘層が遺跡北端では北へと急激に落込み、また、北東にも緩やかに下がっていく。西には「馬池谷」と呼称される開析谷が存在し、西・北にとくに眺望の開けた地形であったと考えられる。

今回の調査では遊離資料であるがナイフ形石器が見つかった。喜連東遺跡ではほかにKR87-3次調査で角錐状石器が出土している[大阪市文化財協会1999]。旧石器時代の遺構はこれまで見つかっていない。しかし、地山層上部がすでに削平されている場合も多く、旧石器時代を対象にした調査自体が少ないため、今後検出される可能性はあろう。また、KR94-8次調査では中位段丘構成層内でナウマンゾウの足跡化石が見つかっており[大阪市文化財協会1995b]、大型食用動物を求めた中期旧石器時代にさかのぼる人類の痕跡が今後、検出される可能性もある。

縄文時代の遺物には各時期にわたる石鏃が出土した。石鏃は他の調査でもしばしば出土している。また、KR94-7次調査では縄文時代中期と推定される石皿が出土した[大阪市文化財協会1995a]。同調査では縄文後期と考えられる土壙も見つかっている。しかしながら、後期以前の遺物は石鏃をはじめとする遊離資料が多く、後期以前は遺構が希薄な状態であった可能性がある。晩期になるとKR86-6・KR94-7次調査などで土壙が見つかっており[大阪市文化財協会1987・1995a]、長原式に属する縄文土器も比較的多く出土するようになる。このころの遺構・遺物の分布は「馬池谷」肩部付近に集中している。また、遺跡北部のKR97-1次調査では石器製作址と考えられるサヌカイトの集中部が認められた[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]。微細なチップがほとんどであるが接合資料もあり、小型品製作を目的とした石器製作址の可能性が高い。細かな時期決定の証拠はないが、縄文時代の遺構と考えられる。これより北および東には地形が落込んでおり、縄文時代には台地縁辺部において集落が営まれていた可能性がある。

2) 弥生時代

今回の調査では遊離資料である石鏃を除いて弥生時代の遺構・遺物ともに検出できなかった。弥生時代前～中期の様相は喜連東遺跡全体でみても明らかでない。遺物の主体は石鏃が主であり、明確な生活の痕跡を認めるることはできない。KR94-7次調査で弥生時代中期の土器が出土しているが[大阪市文化財協会1995a]、「馬池谷」内からの出土であり、ごく少量である。東接する長原遺跡北地区でのDD85-1次調査では弥生時代中期の土器が出土しているが、氾濫性の堆積物中からの出土である[大阪市文化財協会1999]。このように弥生時代前～中期にかけては遺跡周辺においては一旦生活の痕跡が希薄となるようである。

弥生時代後期から庄内期にかけては方形周溝墓が確認されている。遺跡北部、台地先端でのKR99-2・00-2次調査では、後期初頭に位置づけられる方形周溝墓を検出した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002]。また、遺跡西部のKR86-4次調査では後期後葉の方形周溝墓が検出された[黒田1987]。長原遺跡北部地区ではDD85-1次調査で後期前半の方形周溝墓が見つかっている[大阪市文化財協会1999]。これらの立地はいずれも低地に面した台地端部に立地している。喜連東遺跡では墓以外の遺構は検出されておらず、現在のところ弥生時代後期には墓域として利用されていたとしかいえない。しかしながら、谷内からの出土であるがKR94-7次調査では弥生時代後期の土器が一定量出土している。また、やや時期は降るもの、KR99-2・00-2次調査の南東約150mに位置するNG89-8次調査で竪穴住居跡が見つかっている[松本啓子1989]。周囲には周堤が伴い、覆土中より弥生時代後期から庄内期の遺物が出土している。今後、弥生時代の居住域が発見される可能性は否定できない。

庄内期の遺物はKR97-1[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]、KR99-2・00-2次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002]で出土している。また、長原遺跡北部地区においてもDD84-3・85-1次調査で遺構・遺物が見つかっている[大阪市文化財協会1999]。周辺の調査が及んでいないため断定することはできないが、少なくとも庄内期、おそらくは弥生時代後期にさかのぼって喜連東遺跡北東部から長原遺跡北地区にかけて集落域が広がっていると思われる。

3) 古墳時代

今回の調査では5世紀後半の方墳が2基見つかった。喜連東遺跡における古墳は総数5基を数える。埴輪片も多く出土しており、すでに消滅した古墳も数多くあると考えられる。また、長原遺跡北部でも古墳は見つかっており、TK73型式の須恵器を伴う方墳2基を検出したDD84-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1986]は今回の調査地から東にわずか170mに位置する。喜連東遺跡の古墳は、長吉台地先端部に位置する長原古墳群の一支群として考える必要がある。

古墳時代前期および中期前半の集落に係わる遺構・遺物は多くない。中期後半には台地頂部にて遺構・遺物が見られるようになる。KR89-2次調査地西部では溝内から5世紀後半に当たる須恵器・土師器・製塙土器が出土した[大阪市文化財協会1990]。この西側に位置するKR86-3・87-3次調査では東部より同時期の溝や土壙を検出した[大阪市文化財協会1999]ことから、この付近が当時の集落の一部であったと考えられる。また、「馬池谷」内部にあたるKR94-7次調査では古墳時代中期から後期前半の土器が多く出土している[大阪市文化財協会1995a]。同調査では類例に乏しい錫装刀子も出土している。「馬池谷」を400mさかのぼったUR00-8次調査では同時期の多量の土器のほか木製品・鉄製品が多く出土した。また玉類・装飾の施された弓・鉄鏃・動物遺体なども出土し、近隣の集落の存在とともに「馬池谷」内での生産活動および祭祀に係わる行為が想定されている[大阪市文化財協会2002]。これらのことから「馬池谷」を望む一帯も当時の活動域であったといえよう。

古墳時代後期の遺構・遺物は散見されるものの数は少ない。

4)飛鳥～奈良時代

今回の調査で検出した溝群は飛鳥～奈良時代と考えられる。飛鳥時代末葉～奈良時代を通じてKR89-2・KR91-3・92-3・92-7次調査で柵・溝などの区画施設をもつ建物群が検出されている。建物群は東西80m、南北55mの範囲に集中する。柵・溝で区画され、内部に東西10間、南北2間という長大な建物を有する姿は一般の集落とはかけ離れた印象を受ける。南約1,200mに位置する瓜破遺跡ではUR86-11次調査などで区画施設を伴う飛鳥時代の建物群が検出されており[大阪市文化財協会2000a]、長原遺跡の水田経営・管理を目的とした性格を指摘している[大阪市文化財協会2000b]。この建物群の消滅と軌を一にして、喜連東遺跡の建物群が出現することから、水田経営・管理の中心が移動したという見解がある[京嶋覚1990]。もし、これに積極的な理由を与えるとすれば、当時の景観の変化をあげることもできよう。喜連東遺跡では馬池谷内部が飛鳥時代の大規模な洪水層によって覆われたことが明らかになっている。当然この洪水は谷内部にとどまらず、北にある低地をも覆ったと考えられ、あらたな水田開発の場所が周囲に広がったと想像される。確実に飛鳥～奈良時代といえる水田は現在のところ検出されていないが、北のKR97-1、KR99-2・00-2次調査において、この時期の可能性がある水田が検出されている。長吉台地頂部を縦断する今回検出した溝群は飛鳥時代にさかのぼる可能性は高いが、こうした北側の水田経営と密接に結びついたものと推定できる。

5)平安～鎌倉時代

今回の調査では平安時代Ⅲ期新の土壙を検出した。また、土壙のほか掘立柱建物も平安時代に属すると考えられる。ところで喜連東遺跡では9世紀代の遺構は多くない。長原遺跡では8世紀末葉の大規模な洪水によって水田が埋めつくされ、10世紀になるまで放棄されるという[京嶋1990]。喜連東遺跡も同様の推移をたどり、9世紀代の遺構は少なく、10世紀末葉になると遺構・遺物ともに急増する。ただし、9世紀に遺構がほとんどなく10世紀に再び開発が行われるという動きは、理由は不明ながらも他地域でも認められるという指摘がある[佐藤1992]。

とくに密集して遺構が検出されるのは遺跡南東部のKR91-3・92-3次調査を中心とする部分である[大阪市文化財協会1992]。掘立柱建物・堀・井戸・土壙などがある。遺構がもっとも集中する時期は11～12世紀である。また、西に位置する墳墓堂もこの時期から存在した可能性もある。今回検出した遺構・遺物の多くはこの時期に相当する。しかしながら中心部と比較すると希薄であるといわざるをえない。集落の縁辺部に位置していたのであろう。

今回の調査地では明確に鎌倉時代といえる遺構は検出できなかった。喜連東遺跡の集落は鎌倉時代も継続するが、二重の堀に囲まれた方形の区画が新たに出現する。

6)室町時代

今回の調査地では室町時代の遺構は確認できなかったが、耕作地と推定した。遺跡南東部のKR91-3・92-3次調査では15世紀前後に再び、遺構・遺物ともに増加する。多量の中国製磁器が出土し、大規模な堀に囲まれた内部には礎石・瓦葺き建物が存在したと考えられる。建物の性格は西の墳

墓堂との関連から寺院の可能性がある。今回調査地において、遺構が検出されなかったことから、こうした施設との境界が未調査地である調査地西の道路下にあるという想定が可能となったといえよう。

また、今回の調査地を隔てて、東に当たる長吉出戸4丁目で行った調査では13世紀後半～14世紀前半、15～16世紀の遺構・遺物が多く見つかっている[大阪市教育委員会・難波宮宮址顕彰会1979]。15～16世紀には軒瓦や鬼瓦が多数出土しており、寺院の可能性が指摘されている。今回の調査地は推定された2つの寺院に挟まれる位置に当たっており、土地利用を考えるうえで興味深い。

7)江戸時代

江戸時代の遺構としては井戸のほか耕作痕跡を検出した。江戸時代も耕作地として利用されていたといえる。また、遺構の配置から調査地を含む敷地がいくつかに区分されていたことを推定できた。これまでの調査結果から喜連東遺跡では17世紀前後を集落の最後として、その後は耕作地として利用されていたことが明らかとなっている。

8)まとめ

今回の調査では古墳時代には方墳、飛鳥～奈良時代には導排水に係わる溝、平安時代には掘立柱建物・土壙、室町時代には耕作地、江戸時代には井戸・耕作痕跡をそれぞれ確認した。遺構の種類は墓域・集落・生産域と多岐にわたり、その時代に応じた土地利用をされていたことを示す。ただし、いずれも当時の中心ではなく、周縁部の状況を示している。

また、調査地内で想定した区画が平安時代以降共通することも興味深い。平安時代においては調査地付近が集落の東端と考えられ、室町時代には調査地の西に区画施設の存在が想定された。江戸時代にも調査地西側で区画を示すことができた。この区画は現代まで引き継がれている。

調査地が周縁部に当たっていること、同じ位置で区画が想定されることの理由は明らかでないが、調査地の立地する長吉台地の形状とも当然係わりあると考えられる。さらなる調査の蓄積により各時期の遺構の分布と地形とを結びあわせて復元していく必要があろう。

引 用・参 考 文 献

- 井上政雄1992、『大阪府全誌』巻3、p.159
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1986、「薮野貞一氏による共同住宅建設工事に伴う出戸4丁目所在遺跡発掘調査(DD84-1)略報」:『昭和59年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.22-29
- 1999、「東喜連第5住宅建設工事に伴う確認調査(KR97-1)報告書」:『平成9年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.87-96
- 2001、「市営東喜連住宅建設工事に伴う喜連東遺跡B地点発掘調査(KR99-2)報告書」:『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.107-109
- 2002、「市営東喜連住宅建設工事に伴う喜連東遺跡B地点発掘調査(KR00-2)報告書」:『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.105-119
- 大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1979、「長吉出戸4丁目所在遺跡緊急調査概報」:『平野遺跡群緊急調査報告書』、pp.2-15
- 大阪市文化財協会1980、『大阪市道および市営住宅内道路下水道新設工事に伴う喜連東所在遺跡発掘調査略報』
- 1983、「府営喜連住宅建替え工事に伴う喜連東所在遺跡発掘調査(KR82-2)略報」
- 1985、「喜連府営住宅建替に伴う発掘調査(KR84-2)略報」
- 1987、「老人憩の家建設に伴う喜連東遺跡発掘調査(KR86-6)略報」
- 1988、「薮野邸建設に伴う喜連東遺跡発掘調査報告(KR88-4)略報」
- 1990、「東喜連住宅第3期建設工事に伴う喜連東遺跡発掘調査(KR89-2)略報」
- 1992、「大阪市都市整備局による東喜連市営住宅建設に伴う喜連東遺跡発掘調査その2(KR92-3)略報」
- 1993a、「大阪市都市整備局による東喜連市営住宅建設工事(第5期)に伴う喜連東遺跡発掘調査(KR92-7)略報」
- 1993b、「上田彦之氏による建設工事に伴う喜連東遺跡発掘調査(KR93-4)略報」
- 1995a、「大阪市都市整備局による東喜連住宅建設工事に伴う喜連東遺跡発掘調査その1(KR94-7)略報」
- 1995b、「大阪市都市整備局による東喜連住宅建設工事に伴う喜連東遺跡発掘調査その2(KR94-8)略報」
- 1999、「喜連東遺跡発掘調査」:『長原遺跡発掘調査』Ⅶ、pp.107-191
- 2000a、「UR85-39、86-11次調査」:『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.87-126
- 2000b、「UR86-11次調査飛鳥時代建物群の検討」:『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.163-184
- 2001、「大阪市文化財地図」
- 2002、「瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅱ

京嶋覚1990、「水田遺構と古代の長原」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.294-306

1992、「瓜破台地の考古学的環境」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.1-6

京嶋覚・西畠佳恵・上野裕子1990、「平野区喜連東遺跡の奈良時代建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』24号、
pp.1-3

久保和士・宮本康治1995、「喜連東遺跡出土の錫刀子」：大阪市文化財協会編『葦火』59号

黒田慶一1987、「喜連東遺跡発見の方形周溝墓と方墳」：大阪市文化財協会編『葦火』10号、pp.5-7

古代の土器研究会1992、『古代の土器1 都城の土器集成』

佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.102-114

1993、「喜連東遺跡の古墳と埋葬施設」：大阪市協会編『葦火』42号、pp.6-7

佐藤隆・田島富慈美・久保和士・板野史1992、「喜連東遺跡の中世集落と中国製磁器」：大阪市文化財協会編『葦火』40
号、pp.1-6

菅栄太郎1995、「石鎚資料の型式および製作技法の編年的検討」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』
Ⅷ、pp.367-388

鈴木秀典1982、「瓦器椀の編年」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-284

田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店

趙哲済1995、「長原遺跡の標準層序」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.19-34

2001、「瓜破台地東北部の段丘について」：『大阪市文化財協会研究紀要』第4号、pp.7-16

平田洋司2000、「喜連東遺跡発見の弥生時代墳丘墓」：大阪市文化財協会編『葦火』87号、pp.1-3

松本啓子1989、「周堤をもつ竪穴住居」：大阪市文化財協会編『葦火』21号、pp.6-7

横田賢次郎・森田勉1978、「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」：『九州歴史資
料館研究論集』4、pp.1-26

あとがき

本書のタイトルは『喜連東遺跡発掘調査報告Ⅰ』であるが、『長原遺跡発掘調査報告Ⅶ』の付章としてかつて喜連東遺跡を掲載しており、実質的には2冊目となる。

喜連東遺跡の調査が始まって20年以上が経過した。遺跡の時期・性格が不明というまつたくの手探りの状態からの出発であった。その後、調査件数は決して多くないものの、公営住宅という市内としては比較的広い調査面積に恵まれたこともあり、遺跡としての性格は徐々に解明されつつある。本書ではこれらの成果も踏まえたつもりである。とはいっても周辺を含む遺跡北部・西部に不明な部分は多く残されており、遺跡範囲もまだ定まったものとはいえない。

調査が行われるたびに新たな知見が加わっていく。本書の内容も絶えず新しい成果と照合しながら検討を加えていかねばならない。関係諸機関の御理解と御協力により本書が刊行できたことは素直に喜ぶべきことであるが、報告書刊行はひとつの区切りにしかすぎないことを我々は常に肝に命じておく必要があろう。

(松尾信裕)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- い 井戸 2, 4, 6 ~ 9, 11, 14, 15,
28, 31, 33, 35 ~ 39, 43,
44
か 瓦器 14, 15, 27, 29, 30, 32 ~
34, 36 ~ 39
瓦質土器 36 ~ 39
唐津 15, 38
き 器台 18
こ 黒色土器 15, 26, 27, 32, 33, 37
古墳 4 ~ 8, 10, 13, 15, 17,
20, 28, 42
し 志野 38
小溝 4, 14, 15, 24, 28, 33,
38, 39
せ 青磁 14, 15, 32, 34, 37, 39,
40
石鎌 6, 10, 13, 27, 28, 30, 41
な ナイフ形石器 13, 28, 41
は 白磁 9, 14, 15, 29, 32, 34,
37 ~ 40
箸 35, 36
埴輪 5 ~ 8, 10, 13, 17, 18,
20, 22, 25, 28, 29, 37,
38, 42
ひ 肥前系磁器 15, 39, 40
ふ 墳墓堂 6 ~ 9, 32, 43
ほ 方形周溝墓 6, 11, 12, 42
掘立柱建物 8, 13, 15, 17, 25, 30,
43, 44

〈地名・遺跡名など〉

- う 馬池谷 3, 5 ~ 7, 10, 41 ~ 43
瓜破台地 3
き 喜連東遺跡 1, 3 ~ 7, 10 ~ 12, 24,
40 ~ 44
な 長原遺跡 3, 8, 41 ~ 43
長吉台地 3, 8, 41 ~ 44

**Archaeological Report
of the
Kire-Higashi Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of an Excavation
Prior to the Development by
Osaka City Public Health and Welfare Bureau

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text.

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SX : Other features

CONTENTS

Foreword
Explanatory notes
Acknowledgement

Chapter I Background and progress of research.....	1
Chapter II Geographical setting and current investigations	3
S.1 Geographical setting and historical background	3
S.2 Current research.....	5
Chapter III Investigation results	13
S.1 Outline of research	13
S.2 Stratigraphy	15
S.3 Features and remains before the Kamakura Period.....	17
1) Features and remains	17
i) Kofun burial mound	ii) Ditches
iii) Hottatebashira structures	iv) Pits
2) Other remains	27
i) Lithic artifacts	ii) Haniwa
iii) Remains from the stratum 5	
3) Conclusion	30
S.4 Features and remains of the Muromachi Period	
1) Features	31
2) Remains	31
3) Conclusion	32
S.5 Features and remains from after the Edo Period	33
1) Features and remains	33
i) Boundarical facilities	ii) Wells
iii) Ditches	
2) Other remains	40
3) Conclusion	40
Chapter IV Report Conclusion	41
1) Palalitic Period to Jomon Period.....	41
2) Yayoi Period	41
3) Kofun Period.....	42
4) Asuka Period to Nara Period	43
5) Heian Period to Kamakura Period	43
6) Muromachi Period	43
7) Edo Period	44
8) Conclusion	44
References	45
Postscript	
Index	
English Contents	
Referrence Card	

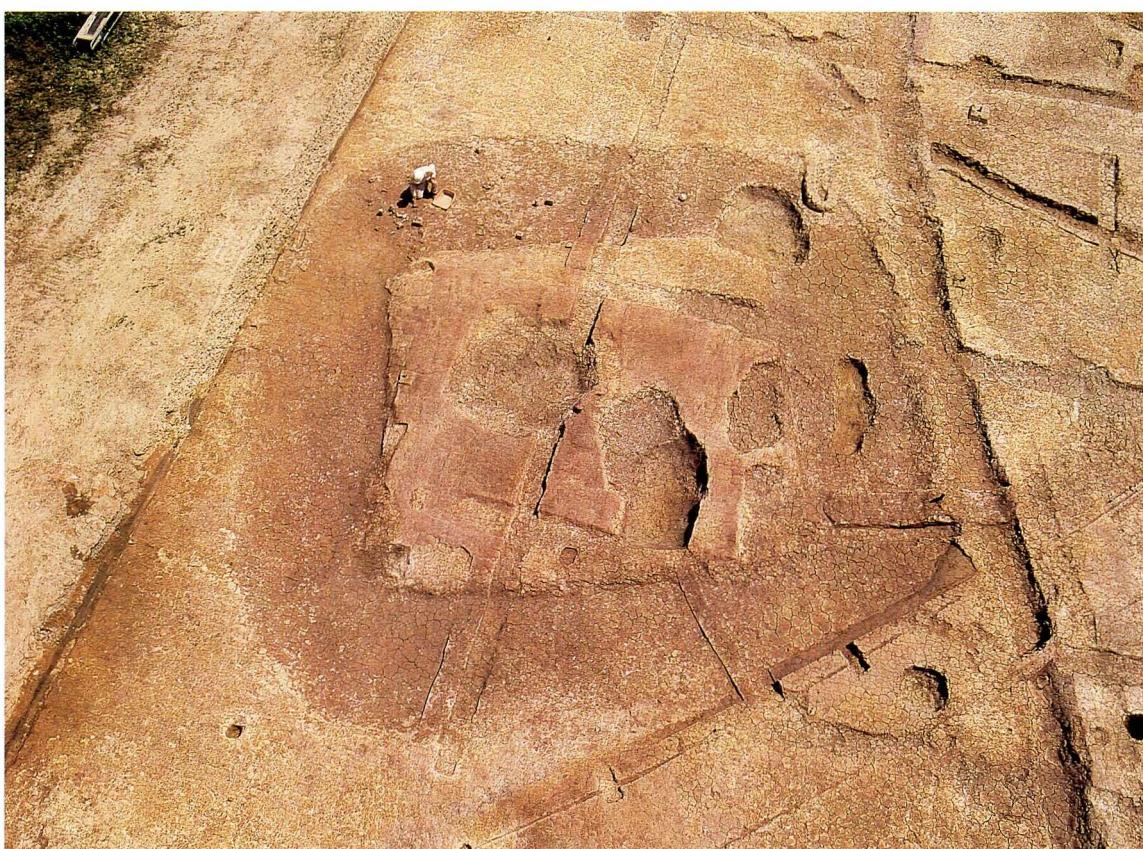
報 告 書 抄 錄

ふりがな	きれひがしいせきはつくつちょうさほうこく1							
書名	喜連東遺跡発掘調査報告Ⅰ							
副書名	大阪市健康福祉局による建設工事に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	松尾信裕・平田洋司							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きれひがし 喜連東遺跡	ひらのくきれひがし 平野区喜連東 5丁目	27126	—	34° 36' 30"	135° 33' 50"	20000201 ～ 20000728	1,450m ²	大阪市 健康福祉局 による建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
喜連東遺跡	その他	旧石器時代		なし		ナイフ形石器		
		縄文・弥生時代		なし		石鏸		
	古墳	古墳時代		方墳2		須恵器・埴輪		
	その他	飛鳥～奈良時代		溝・土壙		土師器・須恵器		
	集落	平安時代		掘立柱建物1・土壙		土師器・黒色土器		
	田畠	室町時代		なし		土師器・瓦器・瓦		
			江戸時代		井戸・小溝群		陶磁器・土師器・瓦	

原色図版



SX501・502検出状況(東から)



SX501全景(北から)

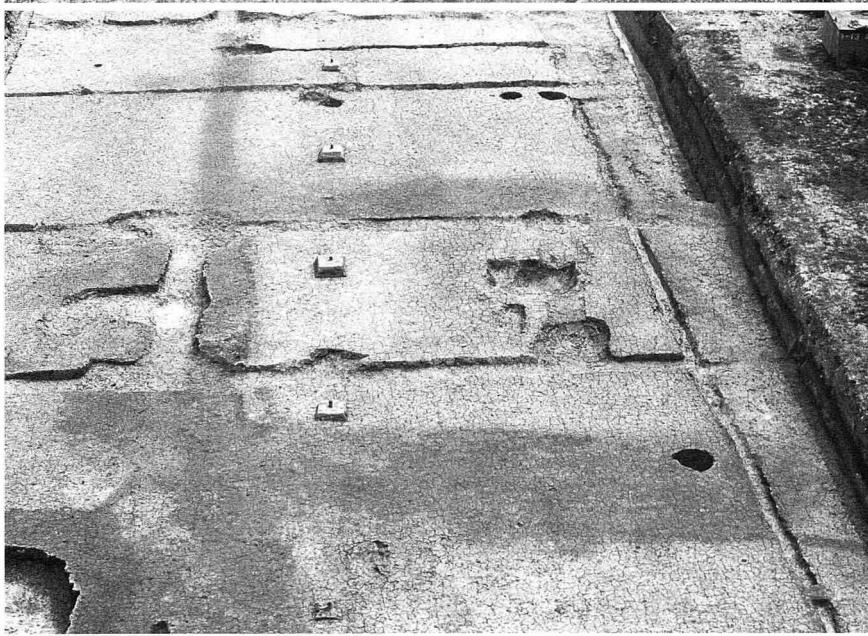
図 版



SX501・502検出状況
(東から)



SX501全景
(北から)



SX502検出状況
(北から)

図版五 鎌倉時代以前の遺構（四）

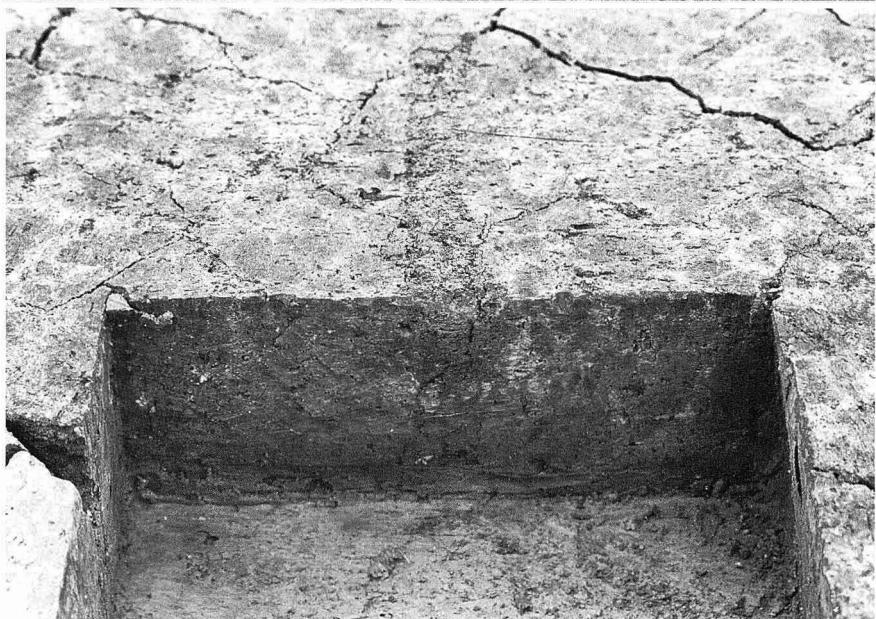
SX501周溝内遺物
出土状況（南から）



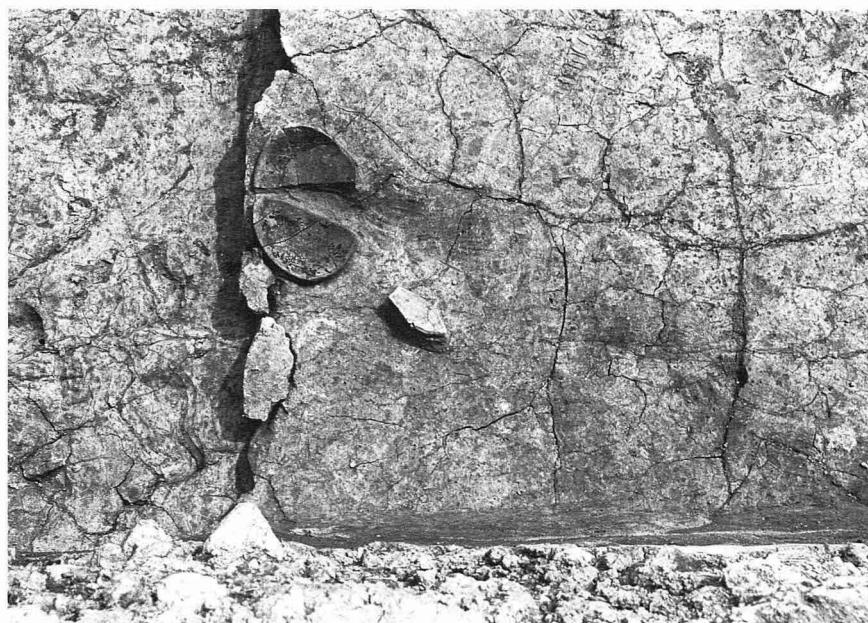
SD506検出状況
(北から)



SD512断面
(南西から)



図版六 鎌倉時代以前の遺構（五）



SK505遺物出土状況
(北から)



SK507検出状況
(南から)



SK507断面
(南から)

図版七 室町時代の遺構・江戸時代以降の遺構（一）

北区全景[室町時代]
(北から)



北区全景[江戸時代以降]
(南から)



南区全景[江戸時代以降]
(北から)





SD301・302
(西から)

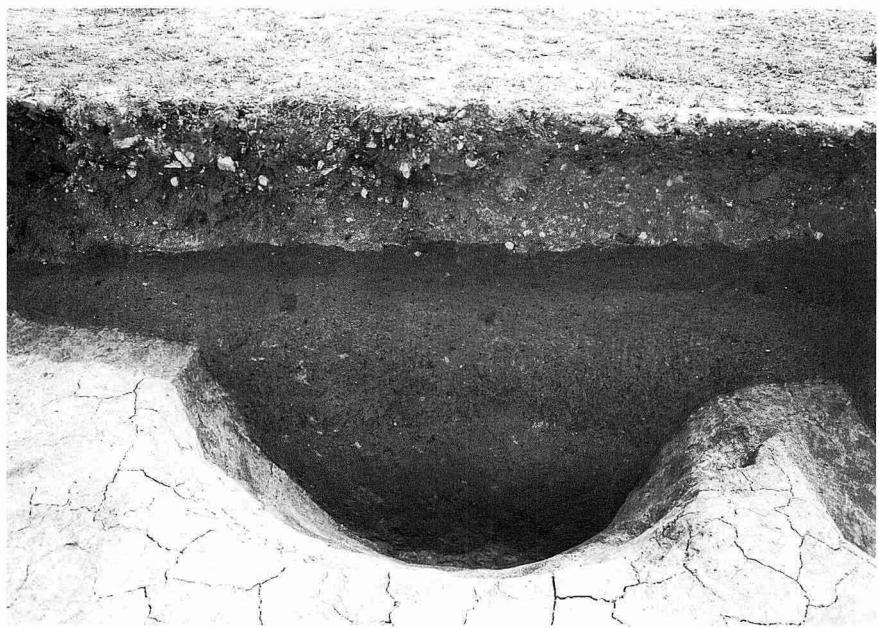


SE301
(西から)

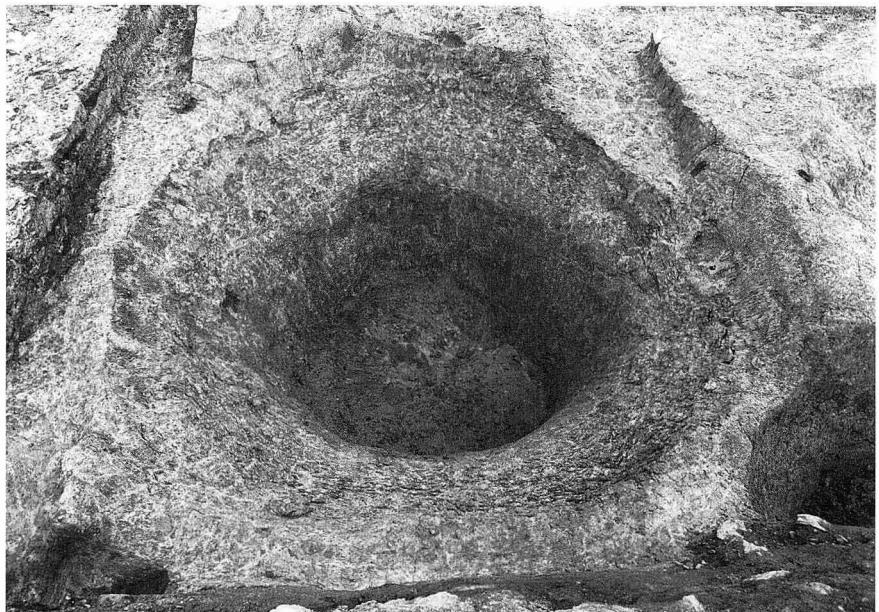


SE303
(北から)

SE304
(北から)

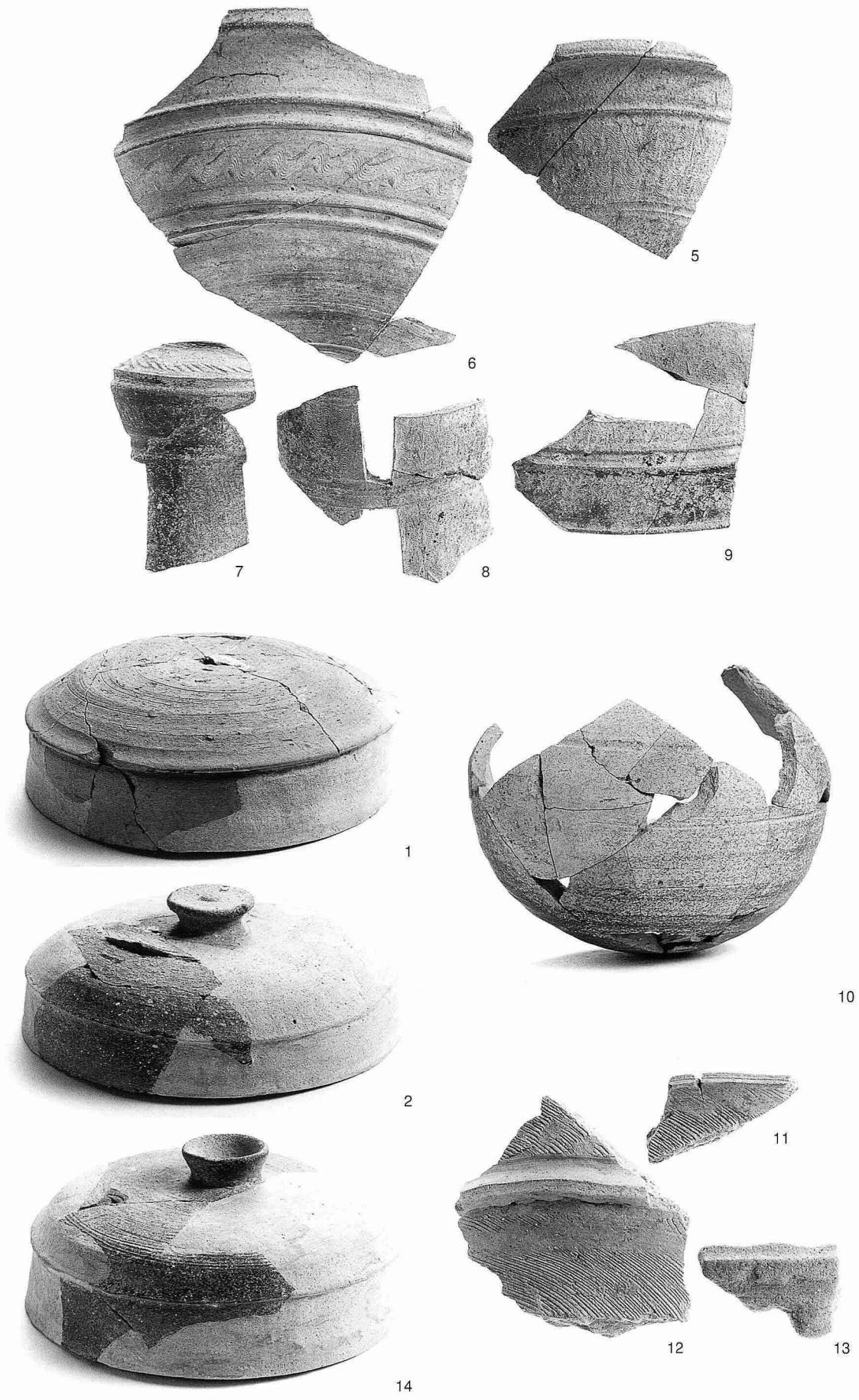


SE307
(西から)

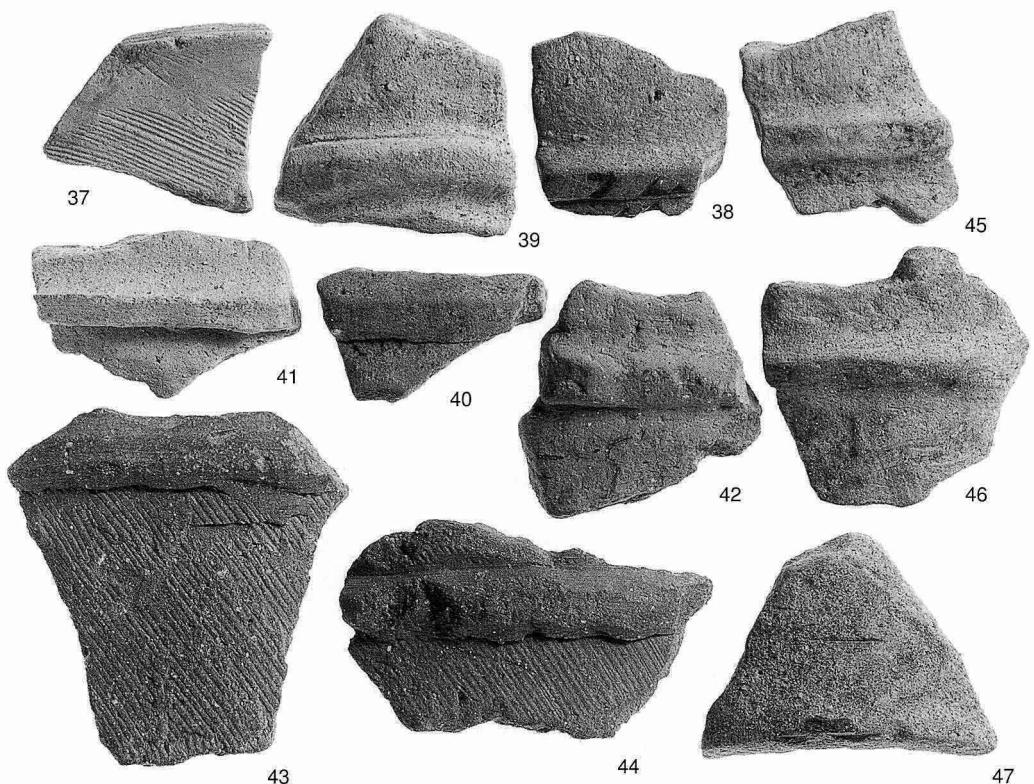


SE311
(西から)

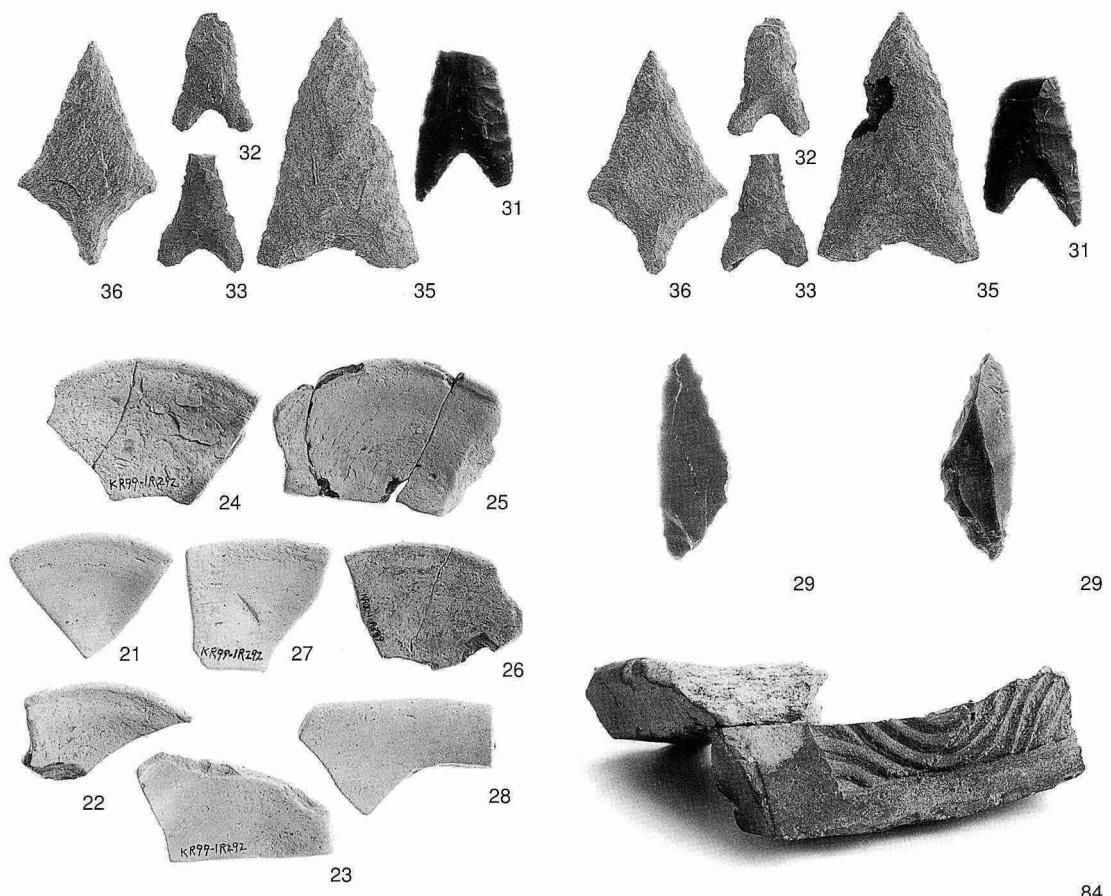




SX501(1・2・5~13)、SD501(14)



埴輪(37~47)



石器遺物(29・31~33・35・36)、SK510(21~28)、SE304(84)

大阪市平野区 喜連東遺跡発掘調査報告 I

ISBN4-900687-65-0

2003年3月31日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南 2-6-8

**Archaeological Report
of the
Kire-Higashi Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of an Excavation
Prior to the Development by
Osaka City Public Health and Welfare Bureau

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Kire-Higashi Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of an Excavation
Prior to the Development by
Osaka City Public Health and Welfare Bureau

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association